久留米市文化財調査報告書　第257集

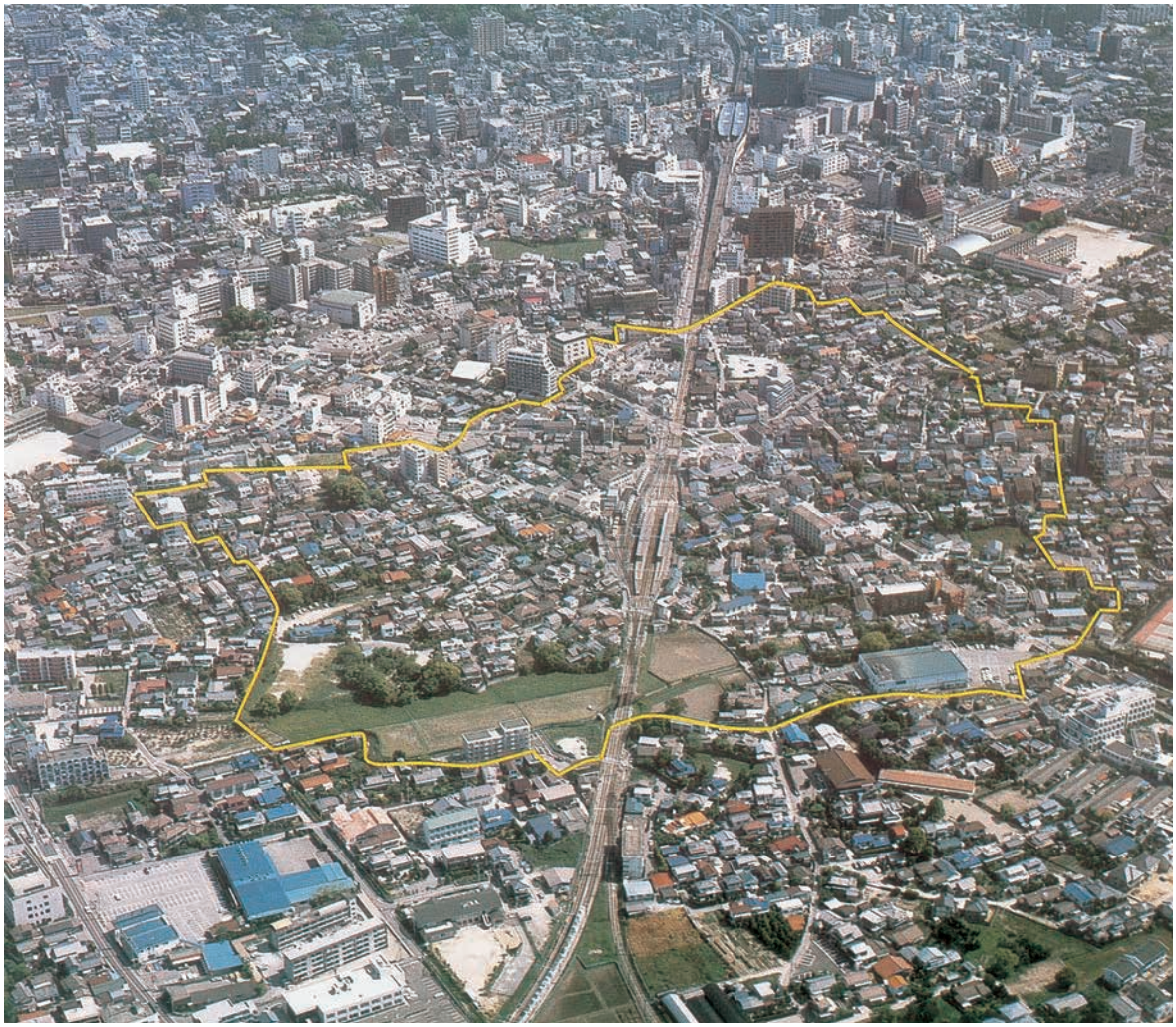
久留米市都市計画事業
「花畑駅周辺土地区画整理事業」に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書（4）

鞍打遺跡Ⅰ

－第１・２次調査－

平成19（2007）年12月

久留米市教育委員会



花畑駅周辺土地区画整理事業地遠景（南西上空から）

鞍打遺跡 Ⅰ

－第１・２次調査－

平成19（2007）年12月

久留米市教育委員会

序

平成17年２月５日、田主丸・北野・三潴・城島の４町と久留米市とが広域合併し、人口30万人を超える新「久留米市」が誕生いたしました。合併後も、九州最大の河川である筑後川と耳納連山の山並みに象徴されるように豊かな水と緑に囲まれ、生活環境に恵まれた文化都市として発展を続けています。また久留米市内には先人たちの残した貴重な足跡である文化財も数多く存在しており、古来からの歴史が大地の至るところに刻み込まれています。

ここに報告する鞍打遺跡は、平成４年度に事業認可を受けた「花畑駅周辺土地区画整理事業」に伴う事前の試掘調査によって新たに発見された遺跡で、同事業に伴う発掘調査により、市街地では極めて希少な弥生時代から古墳時代にかけての集落遺跡であることが判明いたしました。限られた調査範囲ではありましたが、竪穴住居や掘立柱建物などの居住域が確認され、住居跡からは弥生土器をはじめとする数多くの貴重な遺物が出土しています。

土地区画整理事業によって遺跡の大半は消滅いたしますが、本書の発行によって正しい地域歴史の解明、さらには文化財保護思想の理解と普及に多少なりとも貢献できれば幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査に際して多大なご協力をいただきました関係各位に対し、厚くお礼申し上げます。

平成19年12月28日

久留米市教育委員会
教育長　石　川　集　充

例　言

1．本書は、久留米市都市計画事業「花畑駅周辺土地区画整理事業」に伴って実施した、鞍打遺跡第１・２次調査の発掘調査報告書である。

2．調査は第１次調査を大石昇、第２次調査を白木守が担当した。

3．本書に使用した遺構図は調査担当者の他、第１次調査は塚本明美・森啓恵、第２次調査は椛島ミドリ・山田治代が作業にあたった。なお第２次調査の遺構図は主にトータル・ステーションを用いて作成したものである。また遺物の実測・拓本および図面類の清書は、白木・畠中和子・毛利志保が行った。

4．遺構写真は各調査担当者が撮影し、遺物写真は撮影器材トヨビュー45ＧⅡを用い、白黒フィルムＴ－ＭＡＸ100（６×９判）を使用して、久留米市埋蔵文化財センターにおいて白木が撮影した。なお本文中の遺物番号と写真図版の遺物番号は同一である。

5．本書に使用した方位はすべて座標北である。また基準点の座標値は国土調査法第Ⅱ座標系（世界測地系）による。

6. 本書に使用した遺構表記は下記の略号による。

ＳＢ……掘立柱建物　　ＳＩ……竪穴住居　　ＳＫ……土坑

ＳＸ……その他の遺構

7．遺物観察表の凡例は下記のとおりである。

＊法量の数値の単位はcm である。また（　）内の数値は現存値及び復元値を示す。

＊色調は『新版標準土色帖』（日本色研事業株式会社発行、1997年版）による。

＊胎土は0.5mm 未満の砂粒を微砂粒、１mm 未満を細砂粒、２mm 未満を砂粒とした。

8．調査に関わる遺物・記録類は、すべて久留米市埋蔵文化財センターに収蔵・保管され、活用される予定である。

9．本書の執筆は本文目次に記したとおりで、第１次調査に関しては大石昇氏（久留米市都市建設部路政課）より助言を得た。編集は白木が担当した。

本　文　目　次

Ⅰ．はじめに ……（白木）1
1．調査に至る経過 …… 1
2．調査の体制 …… 1
3．試掘調査について …… 3

Ⅱ．位置と環境 ……（白木）5
1．地理的環境 …… 5
2．歴史的環境 …… 5

Ⅲ．第１次調査 ……（白木）7
1．調査の経過 …… 7
2．検出遺構 …… 8
a）掘立柱建物 …… 8
b）竪穴住居 …… 8
c）その他の遺構 …… 9
3．出土遺物 ……（毛利） 9
4．小　結 ……（白木）12

Ⅳ．第２次調査 ……（白木）13
1．調査の経過 …… 13
2．検出遺構 …… 14
a）竪穴住居 …… 14
b）土坑 …… 14
3．出土遺物 ……（畠中）15
4．小　結 ……（白木）17

報告書抄録 …… 巻末

挿　図　目　次

第１図　花畑駅周辺土地区画整理事業地と調査対象範囲（1／5,000）【作成：白木】…… 3
第２図　鞍打地区内における試掘調査実施地点（1／2,500）【作成：白木】…… 4
第３図　鞍打遺跡周辺の主要遺跡分布図（1／25,000）【作成：白木】…… 6
第４図　調査地点の位置と周辺地形図（1／2,500）【作成：白木】…… 6
第５図　鞍打遺跡第１次調査遺構配置図（1／100）【製図：毛利】…… 7
第６図　ＳＢ３実測図（1／80）【製図：毛利】…… 8
第７図　ＳＩ１・２実測図（1／60）【製図：毛利】…… 9
第８図　ＳＢ３、ＳＩ１出土遺物実測図（1／4，鉄製品は1／2）【製図：畠中】…… 10
第９図　ＳＩ１・２、ＳＸ14出土遺物実測図（1／4）【製図：畠中】…… 11
第10図　鞍打遺跡第２次調査遺構配置図（1／150）【製図：毛利】…… 13
第11図　ＳＩ10・15実測図（1／80）【製図：毛利】…… 14
第12図　ＳＫ５実測図（1／40）【製図：毛利】…… 15
第13図　ＳＩ10、ＳＫ５出土遺物実測図（1／4，鉄製品は1／2）【製図：畠中】…… 16
第14図　鞍打遺跡周辺の弥生時代遺構と地形図（1／2,500）【製図：毛利】…… 18

表　目　次

第１表　鞍打遺跡第１次調査出土遺物観察表 …… 12
第２表　鞍打遺跡第２次調査出土遺物一覧表 …… 16
第３表　鞍打遺跡第２次調査出土遺物観察表 …… 17

図　版　目　次

巻頭図版　花畑駅周辺土地区画整理事業地遠景（南西上空から）
図版１　（１）鞍打遺跡第１次調査区全景（北東から）
（２）ＳＢ３完掘状況（北から）
（３）ＳＢ３・Ｐ６遺物出土状況（東から）
（４）ＳＩ１・２全景（北から）
（５）ＳＩ１・２遺物出土状況（北東から）
図版２　第１次調査出土遺物①
図版３　第１次調査出土遺物②
図版４　（１）鞍打遺跡第２次調査区全景（南東から）
（２）ＳＩ10完掘状況（北東から）
（３）ＳＩ10炉検出状況（北東から）
（４）ＳＩ10炉断面（北東から）
（５）ＳＩ15完掘状況（南東から）
図版５　（１）ＳＫ５土層断面（北西から）
（２）ＳＫ５完掘状況（北から）
（３）作業風景（東から）
（４）調査区から北方を望む（南から）
（５）第２次調査出土遺物①
図版６　第２次調査出土遺物②

Ⅰ．はじめに

１．調査に至る経過

花畑駅周辺土地区画整理事業は、西日本鉄道「花畑駅」を中心とする約24haを対象とした区画整理事業で、西鉄大牟田線鉄道高架事業と併せ、鉄道によって東西に分断された両地区の交通体系と土地利用の一体化及び密集市街地の居住環境改善と向上を目的とし、平成４年７月に事業認可を受けたものである。平成７年９月26日に区画整理部局と文化財部局との間で、同事業に伴う埋蔵文化財の取扱いに関して、試掘調査地点・期間、費用負担、本調査実施期間などの工程に関する協議をもった。花畑駅周辺はこれまで遺跡の空白地帯であったが、平成７年11月29日から同年12月21日にかけて、37地点に51本の試掘トレンチを設定したところ、花畑駅を挟んだ西側の金丸地区と、東側の鞍打地区において埋蔵文化財の包蔵地が確認された。そこで前者を金丸遺跡、後者を鞍打遺跡と称し、事業着工前に発掘調査を実施する必要がある旨を回答した。このうち金丸遺跡については、平成11年度から13年度にかけて５地点（区画整理事業に伴う調査３地点、西鉄大牟田線鉄道高架事業に伴う調査２地点）の発掘調査を実施している。

一方、花畑駅の東方に広がる鞍打遺跡については、平成７年度に実施した試掘調査の結果を踏まえ、さらに詳細な調査対象範囲を決定する必要があった。平成15年７月４日付で久留米市建設部花畑地区整備推進室より、鞍打地区2.91haについて「埋蔵文化財包蔵地の事前審査依頼書」の提出を受けた。同年９月11日に１地点、９月19日に５地点の試掘調査を実施した結果、鞍打地区を東西に横断する県道以北については遺構が確認されなかったため調査対象外とし、県道以南については既存家屋の移転後に改めて試掘調査を実施する旨を９月25日付（15文財第１－192号）で回答した。その後、平成16年７月12・13日に計９地点の試掘調査を実施した結果、事業予定地南端部に位置する２地点において遺跡が確認されたため、当該地については事業開始に先立って発掘調査が必要である旨を７月30日付（16文財第413号）で回答した。

第１次調査は、平成16年８月10日付で久留米市西町951－２における「埋蔵文化財発掘調査の依頼」が花畑地区整備推進室より提出されたのを受け、同年８月25日から９月13日まで現地調査を実施した。また第２次調査は、平成18年12月６日付で久留米市西町951－１，－５，－６における「埋蔵文化財発掘調査の依頼」が花畑地区整備推進室より提出されたのを受け、平成19年３月13日から27日まで現地調査を実施した。

２．調査の体制

鞍打遺跡の調査ならびに整理にかかる調査体制は下記のとおりである。

≪平成16年度≫

調査主体：久留米市教育委員会	教育長	石川　集充			
調査総括：教育文化部	部　長	石原　廣士		次　長	久保田　明
文化財保護課	課　長	関　知彦		課長補佐	堤　諭吉
文化財保護課主査		立石　雅文			
事務主査		松村　一良	大石　昇		
庶務担当		権藤　節子			
調査担当		大石　昇（第１次調査）			

整理担当　畠中　和子　香椎　佳子
区画整理：建設部　部　長　稲益冨支典
花畑地区整備推進室　室　長　眞名子文男
技術主査　田嶋　浩之　担　当　白石　英樹

≪平成18年度≫
調査主体：久留米市教育委員会　教育長　石川　集充
調査総括：久留米市文化観光部　部　長　緒方　眞一　次　長　辻　文孝
文化財保護課　課　長　関　知彦
課長補佐兼課主査　立石　雅文
事務主査　松村　一良　近澤　康治
庶務担当　本庄ともえ　権藤　節子（～平成18年４月）
調査担当　白木　守（第２次調査）
整理担当　畠中　和子　原田　志保
区画整理：都市建設部　部　長　稲益冨支典
花畑地区整備推進室　室　長　富山　登
技術主査　田嶋　浩之　担　当　田嶋健太郎

≪平成19年度≫
調査主体：久留米市教育委員会　教育長　石川　集充
調査総括：久留米市文化観光部　部　長　緒方　眞一　次　長　辻　文孝
文化財保護課　課　長　関　知彦
課長補佐兼課主査　立石　雅文　山口　淳
事務主査　松村　一良　近澤　康治
庶務担当　本庄ともえ　報告書担当　白木　守
整理担当　畠中　和子　毛利　志保（旧姓：原田）

発掘調査臨時職員
≪第１次調査≫
勝田美代子・河野　好子・塚本　明美・津留崎利子・野口カオル・森　啓恵
≪第２次調査≫
大坪　進・岡崎　悦尚・椛島ミドリ・国武　三歳・堤　淳子・中島　大喜・西田美恵子
深山智富美・堀江　俊文・森山美千代・柳　鈴子・山田　治代・良永　洋子・吉村　智子

なお、これまでに久留米市都市計画事業「花畑駅周辺土地区画整理事業」に伴う埋蔵文化財調査報告書として３冊の報告書が刊行されている。いずれも金丸遺跡の調査報告書であるが、本事業に伴う報告書としては通し番号が付されていなかったため、今後の整理や混乱を避けるためにも本書を（４）とし、過去の報告書についてもそれぞれに通し番号を付しておく。

（１）：『金丸遺跡』久留米市文化財調査報告書第160集，2000年３月刊行
（２）：『金丸遺跡Ⅱ－第３次調査－』久留米市文化財調査報告書第174集，2001年３月刊行
（３）：『金丸遺跡Ⅲ－第５次調査－』久留米市文化財調査報告書第191集，2003年３月刊行
（４）：本書

３．試掘調査について

鞍打地区内においては平成７年度に８地点の試掘調査を実施し、その段階では６地点について埋蔵文化財の包蔵地である可能性が指摘されていたが、試掘面積が余りに些少であったため、再度、試掘調査を行う必要性があった。その後、平成15年度に鞍打地区2.91haについて「埋蔵文化財包蔵地の事前審査依頼書」が提出されたのを受け、計15地点の試掘調査を実施する運びとなった。以下、簡単に各トレンチ調査の概要を記す。

【平成15年９月11日実施】

①トレンチ：撹乱が著しく、表土下55㎝で黄灰色粘土の地山に至る。樹木倒壊痕あり。

【平成15年９月19日実施】

②トレンチ：表土15㎝、灰黒色シルト25㎝で地山に至る。遺構なし。

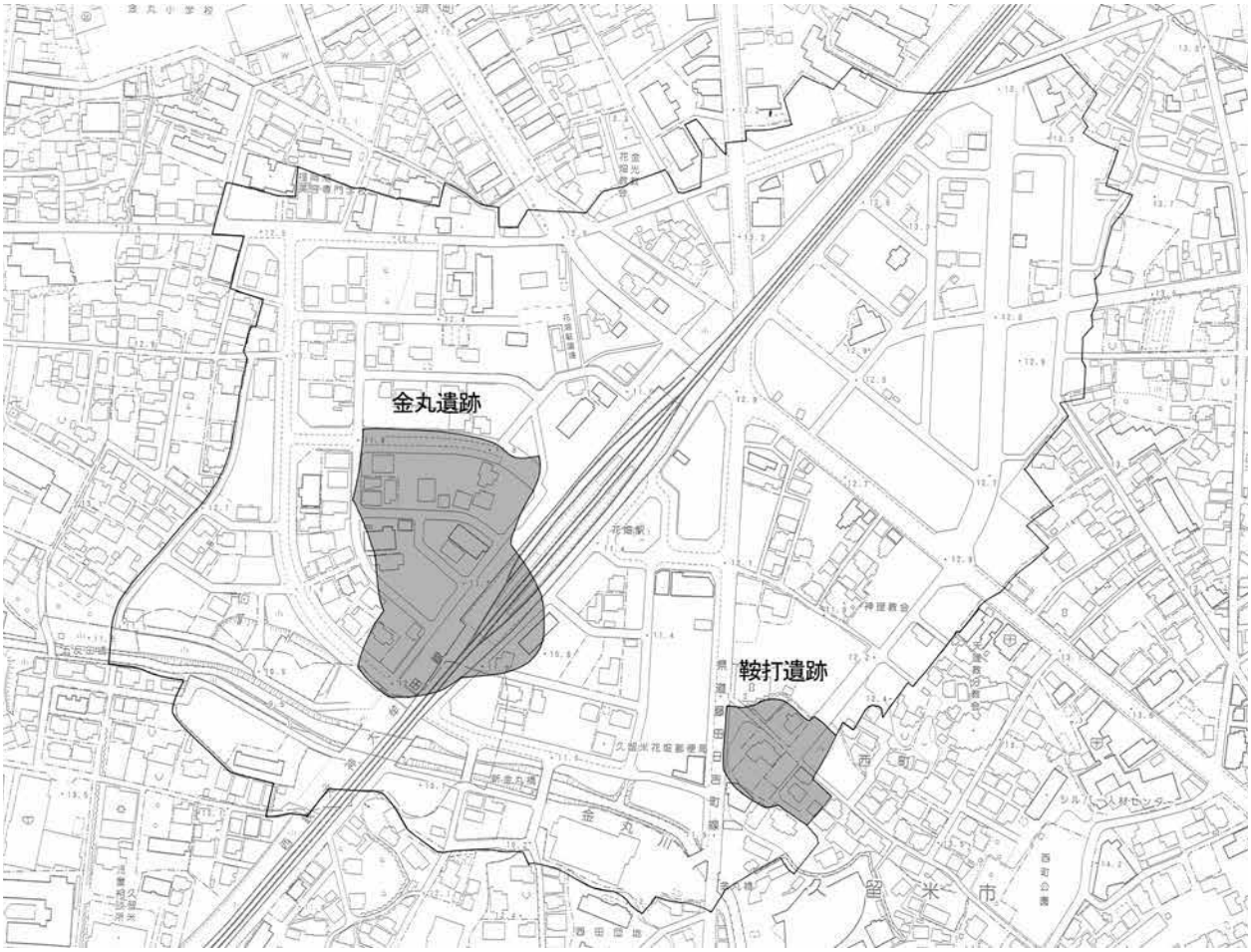
③トレンチ：表土25㎝、灰色土15㎝、黒色シルト13㎝で地山に至る。トレンチ南端部で幅50㎝・深さ15㎝程度の東西溝を検出。18世紀代と考えられる陶磁器が出土。

④トレンチ：表土30㎝、灰色土15㎝で地山に至る。遺構なし。

⑤トレンチ：表土15㎝、灰色シルト30㎝、黒色シルト15㎝で地山に至る。遺構なし。

⑥トレンチ：表土15㎝で黄灰色シルトの地山に至る。遺構なし。

【平成16年７月12日実施】



第１図　花畑駅周辺土地区画整理事業地と調査対象範囲（1／5,000）

⑦トレンチ：表土20㎝、真砂土40㎝、廃材を含む客土30㎝、暗灰色粘質土40㎝、明灰色粘質土15㎝、黒灰色粘質土45㎝、暗灰色砂質土５㎝で明黄白色粘質土に至る。谷部分に相当し、弥生土器片が出土したが遺構なし。

⑧トレンチ：黒褐色土の盛土55㎝の直下で地山に至る。土坑およびピットを検出。

⑨トレンチ：表土40㎝、暗灰色土30㎝で地山に至る。ピットを検出し、土師器細片が出土。

⑩トレンチ：駐車場部分のためバラス10㎝、旧表土50㎝で地山に至る。溝１条を検出したが近代の所産と考えられ、調査対象外。

⑪トレンチ：暗灰色土の表土45㎝の直下で黄白色シルトの地山に至る。撹乱が多い。

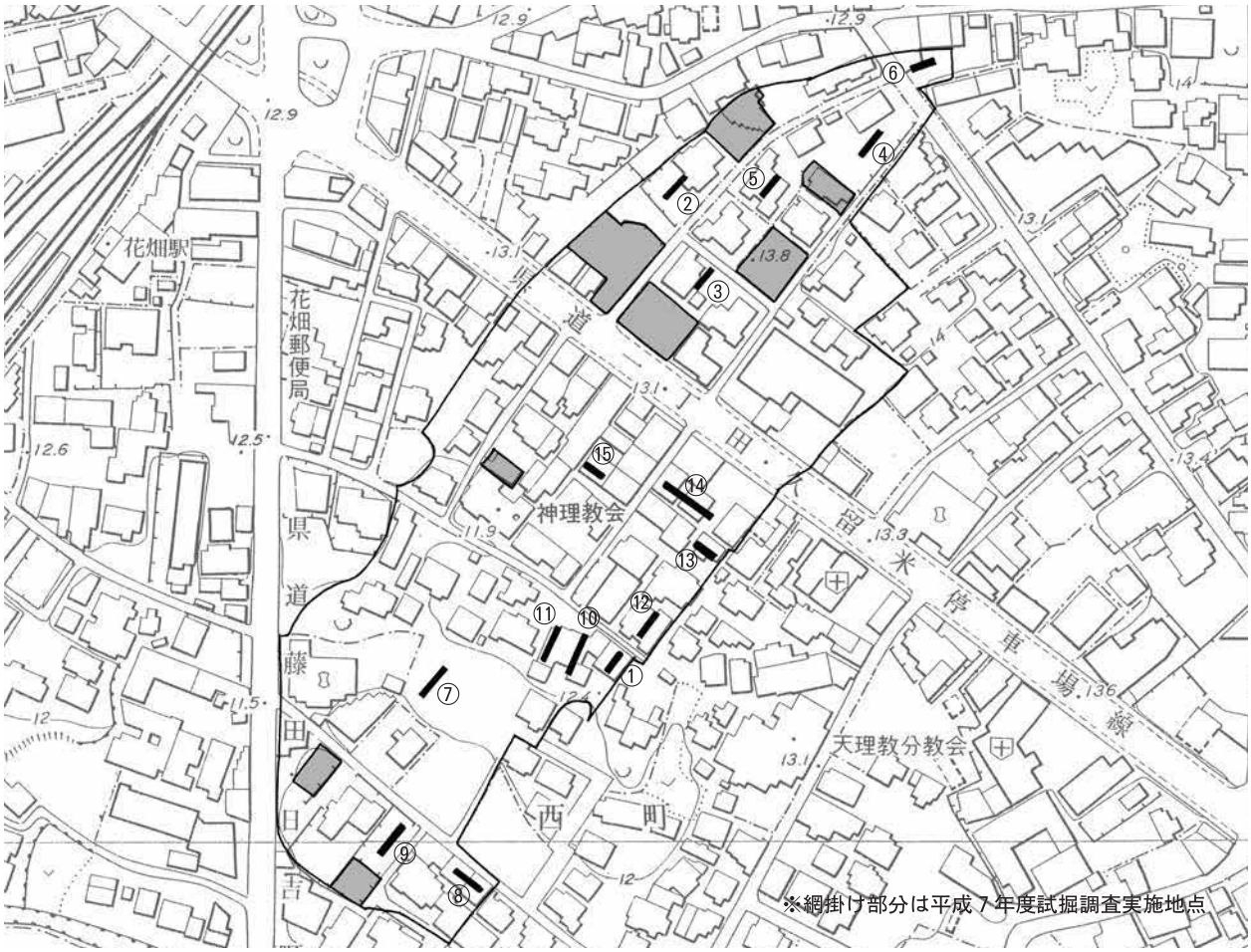
【平成16年７月13日実施】

⑫トレンチ：表土10㎝、黒灰色砂質土45㎝で地山に至る。ピットや土坑状の遺構を検出したが近世以降の所産と考えられ、調査対象外。

⑬トレンチ：表土10㎝、黒褐色土35㎝で地山に至る。一部でピットや井戸状の遺構を検出したが近世以降の所産と考えられ、調査対象外。

⑭トレンチ：表土15㎝、灰色粘質土15㎝、黒褐色土20㎝、黒色土10㎝で地山に至る。ピット数基を検出したが近世以降の所産と考えられ、調査対象外。

⑮トレンチ：バラス10㎝、黒褐色土45㎝、黒色土５㎝で暗褐色土の地山に至る。ピット数基を検出したが近世以降の所産と考えられ、調査対象外。



第２図　鞍打地区内における試掘調査実施地点（1／2,500）

Ⅱ．位置と環境

１．地理的環境

鞍打遺跡は、西日本鉄道「花畑駅」の東方に展開する遺跡である。平成４年度に事業認可を受けた「花畑駅周辺土地区画整理事業」に伴う事前の試掘調査によって新たに確認された遺跡で、周辺は同事業によって金丸遺跡と鞍打遺跡が確認されるまでは遺跡の空白地帯であった。花畑駅周辺は幹線道路や西鉄天神大牟田線に代表されるように交通の要衝でもあり、沿線は商業地として賑やかな町並みを形成しているが、幹線道路から一歩裏手に回ると閑静な住宅街が佇んでいる。鞍打遺跡の南方100ｍには金丸川が北流し、遺跡の南方で大きく西へと流れを変え、およそ３㎞西流して筑後川へと注ぐ。鞍打遺跡一帯は小規模な谷が幾つも入り込んだ地形を呈しており、低台地上の標高は12～13ｍを測る。

２．歴史的環境

古代以前の遺跡は金丸川下流において認められるものの、鞍打遺跡の所在する西町周辺は遺跡の空白地帯といっても過言ではなく、1979年発行の『福岡県遺跡等分布地図』にもわずかに寺社が掲載されているのみである。以下、周辺の歴史的環境について時代ごとに概観する。

縄文時代　金丸遺跡第２次調査で５基の土坑が検出され、埋土の状況から該期の遺構として報告されているが、出土遺物は皆無であり詳細は不明。ただし調査区内では後期の剥片鏃１点が採集されている。また第５次調査では落とし穴状遺構１基と土坑１基が検出され、土坑からはサヌカイト製の石鏃１点が出土している。津福寺山遺跡では早期の押型文土器や石器剥片が、また山ノ内遺跡でも落とし穴状遺構や押型文土器が確認されている。

弥生時代　金丸遺跡や鞍打遺跡の調査によって後期の竪穴住居や掘立柱建物が確認され、市街地では初めてとなる居住域が明らかとなった。金丸遺跡では南東部において後期の竪穴住居２軒が検出されている。この他には北西に展開する近世城下町関連の調査においても弥生土器の破片が出土する例があるものの、詳細は全くもって不明である。

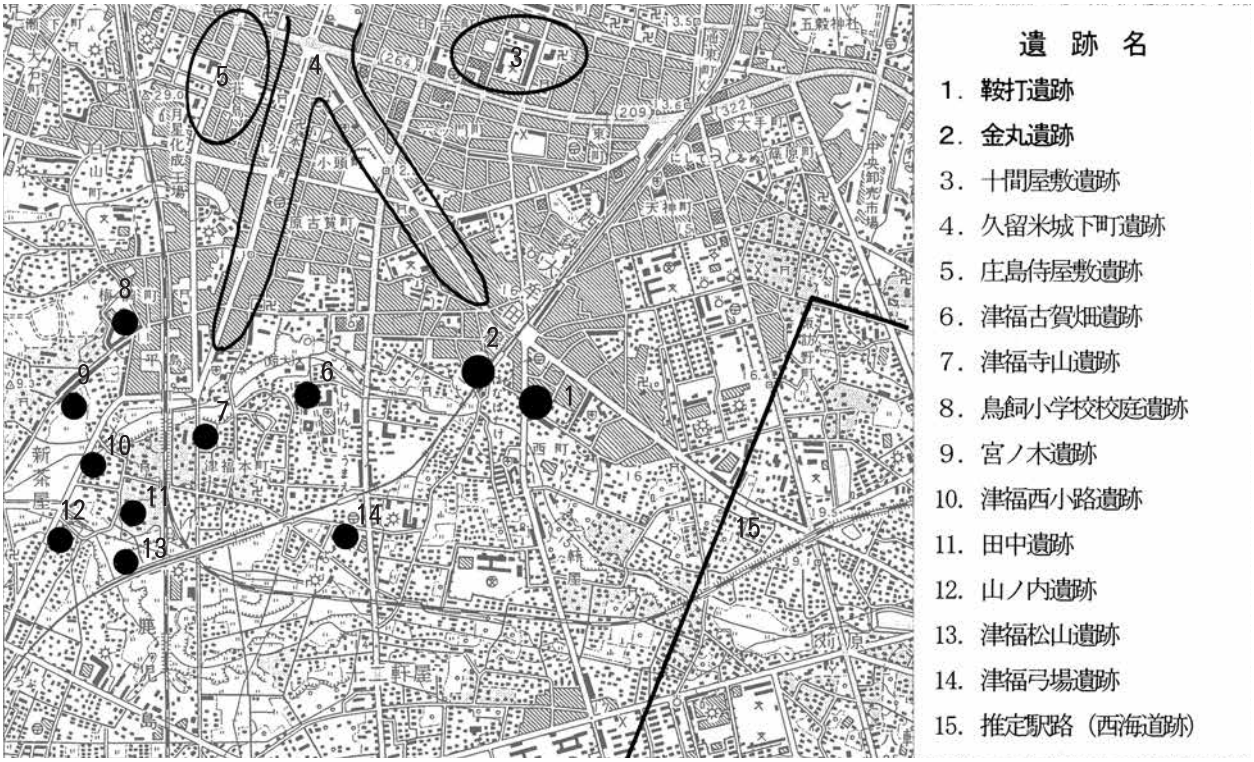
古墳時代　西方の金丸川左岸に位置する津福古賀畑遺跡・田中遺跡・津福西小路遺跡において、４世紀代の竪穴住居が計４軒確認されている。これらの住居は旧久留米市域内の４世紀代の遺構としては唯一の居住域である。さらに西方に位置する宮ノ木遺跡では６世紀代の溝が１条認められる。金丸遺跡第３次調査では竪穴住居３軒が検出され、出土遺物は皆無であるものの４本柱であることから古墳時代もしくは奈良時代の住居と考えられている。

奈良～平安時代　律令期の筑後国は10郡を管轄し、鞍打遺跡一帯は三潴郡鳥養郷の一部に組み込まれていた。この時期の遺構は周辺では極めて少なく、山ノ内遺跡で９世紀代の掘立柱建物、鳥飼小学校校庭遺跡で平安期の土壙墓２基が確認されている以外では、東方800ｍに駅路（西海道）が走る程度である。

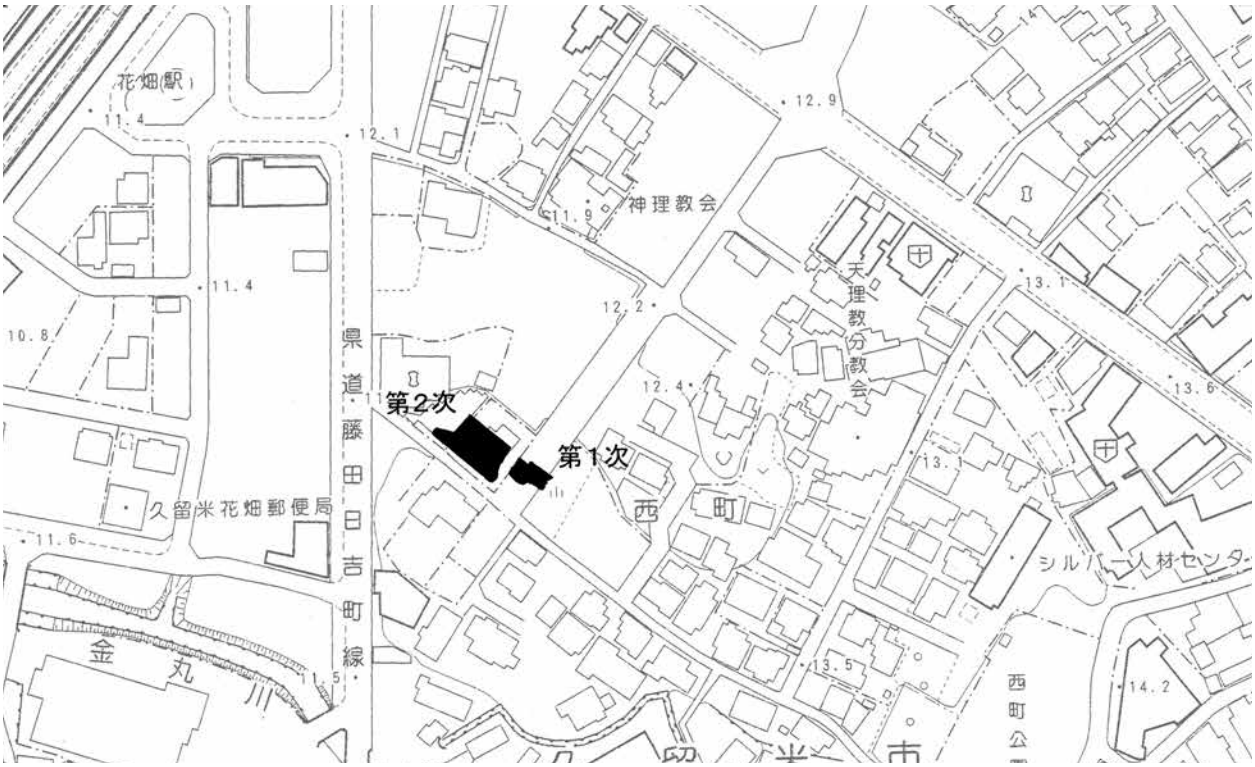
中世　田中遺跡では13世紀代の土壙墓１基、津福西小路遺跡でも12世紀後半の土壙墓１基が認められ、ともに副葬品を有している。また津福西小路遺跡からは14～16世紀の屋敷跡を取り囲むと考えられる溝も確認され、明染付などの輸入陶磁器も多く出土している。鳥飼小学校校庭遺跡でも15～16世紀の溝が数条確認され、土師器や輸入陶磁器の出土が見られる。

近世　元和七年（1621）の有馬豊氏による入国を契機として城下町が本格的に整備され、花畑駅

の北西付近にまで細長く町屋（小頭町）が築かれた。鞍打遺跡や金丸遺跡一帯はいわゆる城下から外れているため、城下絵図等から当時の様子を探ることは困難であるが、周辺の遺跡においては近世の遺物も断片的に出土しており、農村部であったものと推定される。



第３図　鞍打遺跡周辺の主要遺跡分布図（1／25,000）



第４図　調査地点の位置と周辺地形図（1／2,500）

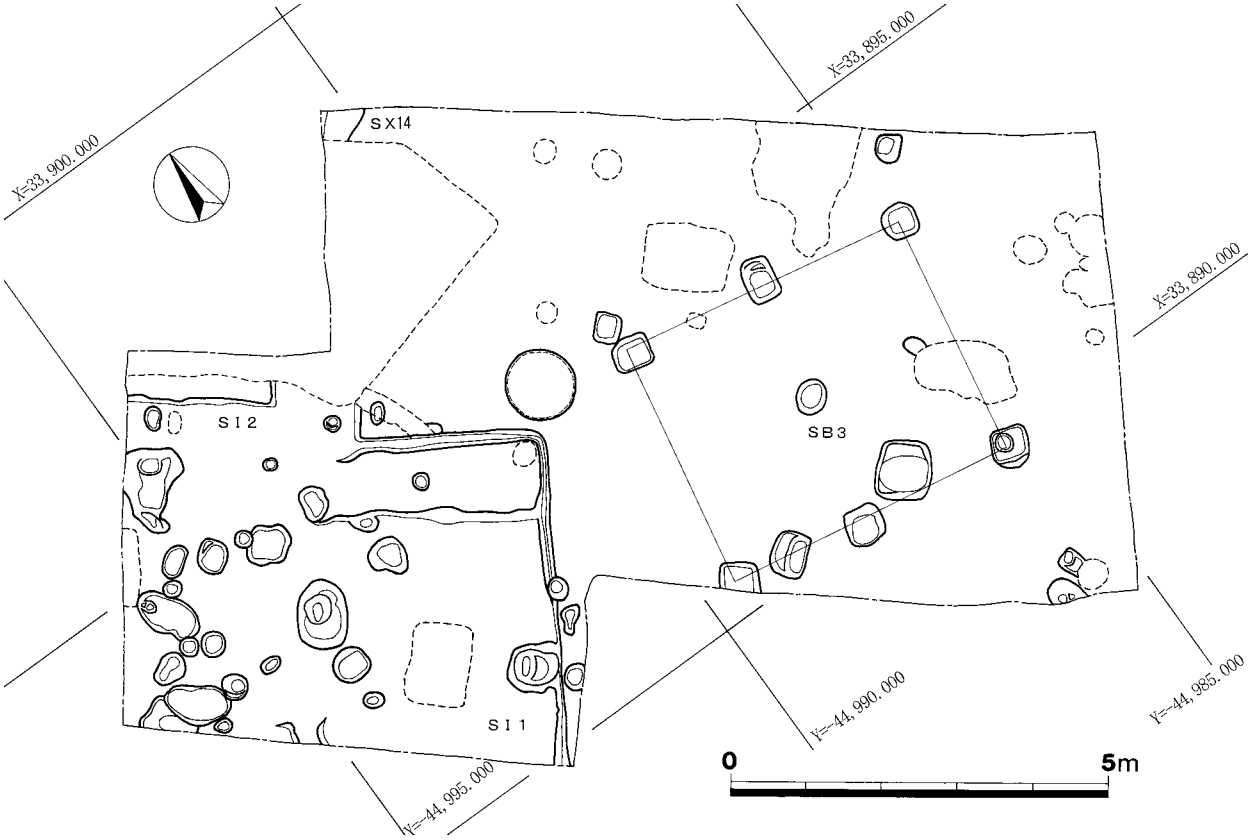
Ⅲ．第１次調査

１．調査の経過

第１次調査地は久留米市西町字北鞍打951－２に所在し、区画整理事業地内に新設される道路部分を対象に実施した。

平成16年８月25日より重機による表土剥ぎを開始する。現地表面から－30～50㎝ で遺構検出面に達する。南西隅で竪穴住居と考えられるプランを確認したため、一部を拡張する。26日より作業員を投入し、遺構の検出作業、平板による略図（1/40）を作成した後、竪穴住居を切り込む撹乱の掘り下げを行う。27日より掘立柱建物（ＳＢ３）および竪穴住居（ＳＩ１・２）の掘り下げを開始。竪穴住居は２軒が切り合っている状況が看取されるものの、先後関係は不明瞭で今ひとつ判然としない。30日は台風16号の接近により現場作業を中止し、翌31日よりＳＩ１・２の掘り下げを再開する。９月２日より遺構の割付を行い、水糸メッシュ法にて実測作業を開始する。６日には写真撮影に備えて調査区内の清掃を開始するが、台風18号の接近（翌７日に上陸）による影響で雨が降り出したため、テントや発掘機材を撤収して作業を中断する。８日に再び調査区内の清掃を行い、高所作業車を用いて全体写真撮影を実施。９日に実測作業およびエレベーション作業、個別遺構の写真撮影等の補足作業を終え、翌週の13日に重機により調査区を埋め戻し、残りの発掘器材を撤収して現地調査を終了する。

遺構の測量は水糸メッシュ法にて1/20で作成した。また記録写真はモノクローム６×７、カラーリバーサル６×７・35㎜で撮影した。



第５図　鞍打遺跡第１次調査遺構配置図（1／100）

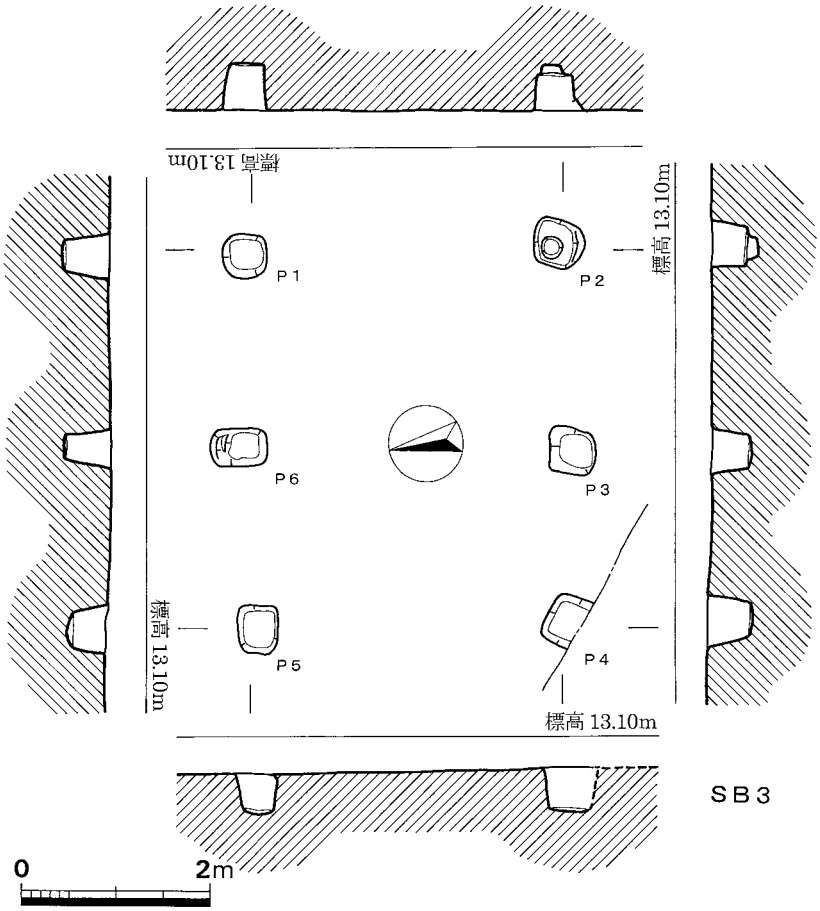
２．検出遺構

掘立柱建物１棟・竪穴住居２軒以外には、若干のピットと撹乱が認められたのみで、全体に遺構密度は低い。竪穴住居は検出プランから判断して２軒が重複しているものと考えられるが、先後関係は明らかにし得なかった。竪穴住居やピットの残存状況から判断すれば、整地等によって後世に遺構が大きく削平されてしまったものと考えられる。層序は①砂利を含む表土（９～19㎝）、②暗褐色土の包含層（20～27㎝）の順に堆積し、その下は淡青灰色粘土の地山に至る。

ａ）掘立柱建物

ＳＢ３（第６図，図版１）

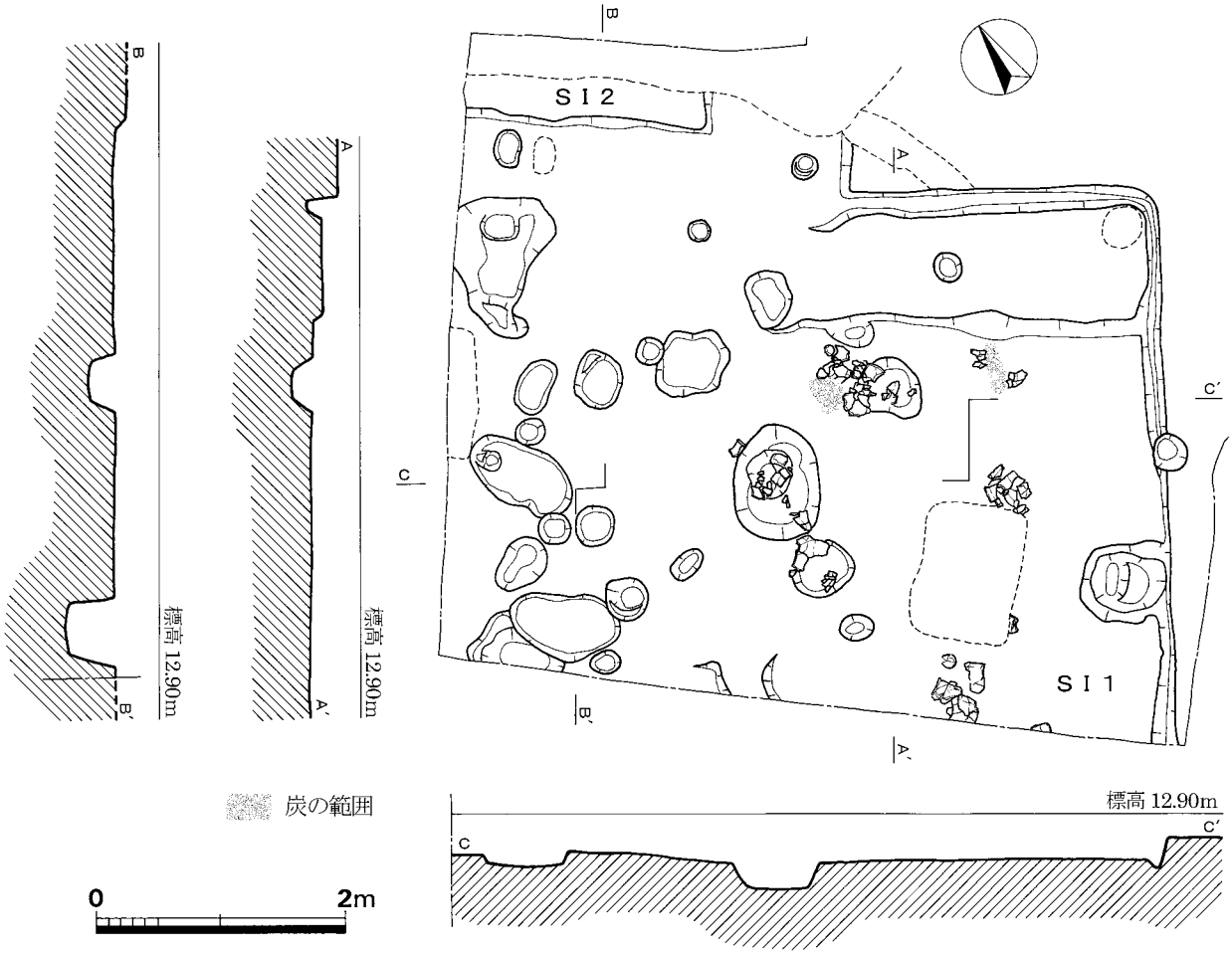
調査区の東半部で検出した、２間×１間の掘立柱建物である。Ｐ４柱穴の一部が調査区外にかかるものの、概ね桁行長4.0ｍ（柱間寸法2.0ｍ）×梁間3.3ｍの13.2㎡の床面積を有する建物と考えられる。柱穴の掘形は一辺40～60㎝の隅丸方形もしくは長方形を呈し、深さ40～50㎝を測る。また一部の柱穴においては柱痕も確認できた。出土遺物は全て弥生土器で、Ｐ６掘形から小鉢が出土した以外は甕の破片が大半を占める。建物の主軸はN-11°-Eを示し、西方に位置する竪穴住居とは主軸を異にするが、限られた出土遺物から判断して住居とほぼ同時期の建物と考えられる。



第６図　ＳＢ３実測図（1／80）

ｂ）竪穴住居

ＳＩ１・２（第７図，図版１）　調査区南西部で検出した住居で、南西部は調査区外に延び、また北側は撹乱によって切られているため、全体の規模は明らかでない。プランから判断して２軒の住居が重複しているものと考えられ、サブトレンチを設定して切り合い関係の把握に努めたが、最後まで先後関係は明らかにし得なかった。よって遺物は東半部をＳＩ１、北端の撹乱と重複するベッド状遺構付近をＳＩ２、その他をＳＩ１・２として扱っている。ＳＩ１とした東半部では周囲に深さ５～10㎝の壁溝を有し、北東部には高さ10㎝程度のベッド状遺構を設ける。またＳＩ２とした北端部でも高さ10㎝ 程度のベッド状遺構と考えられる段が認められる。床面で検出したピットは深さ数㎝と浅いものが多く、炉跡や主柱穴は今ひとつ判然としない。また焼土や灰の広がりもほとんど認められず、わずかに１箇所で炭が確認されたのみである。全体でコンテナ２箱弱の遺物が出土し、大半が弥生土器で甕・鉢・器台・高杯などが見られる。これらの遺物は大半が東半部の床



第７図　ＳＩ１・２実測図（1／60）

面付近から出土したものであり、西半部ではほとんど認められなかった。弥生土器以外では刀子１、黒曜石とサヌカイトの剥片が各１、若干の粘土塊が出土した。後期後半に位置付けられる。

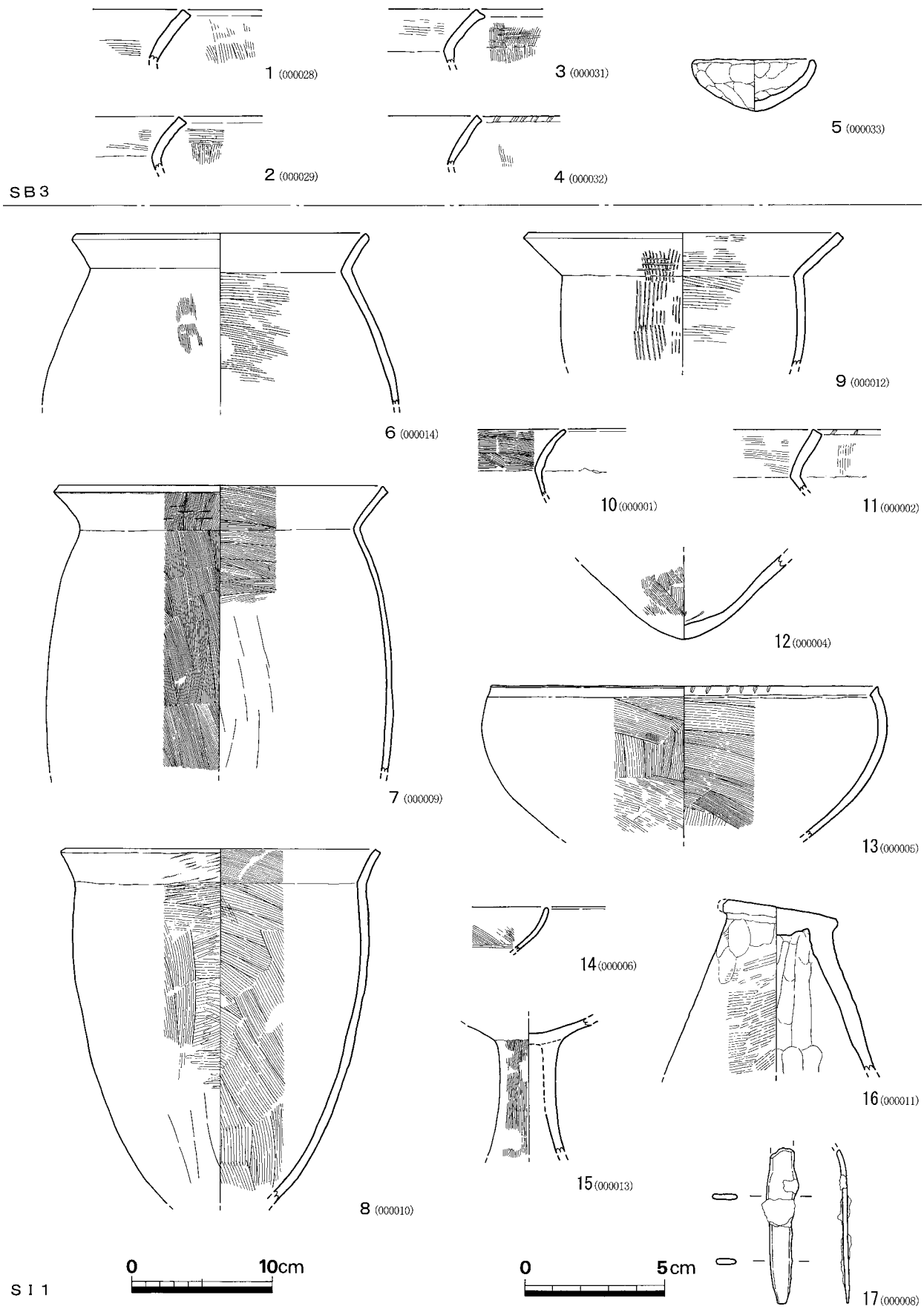
ｃ）その他の遺構

ＳＸ14（第５図）　調査区北西隅で検出した深さ25㎝ 程度を測る落ち込みで、撹乱によって切られ、かつ調査区境界に位置するために全容は不明であり、遺構の性格付けは困難である。弥生土器の破片が数点出土しており、限られた遺物から判断して弥生時代後期の土坑もしくは溝の一部と考えられる。　**（白木）**

３．出土遺物

全体でパンコンテナ２箱程度の遺物が出土した。大半が弥生土器で、撹乱からは近代陶磁器が10点余り出土している。また土器類以外では石器の剥片が２点、軽石が１点、鉄製の刀子が１点、粘土塊が18点と炭片が１点出土した。出土遺物は大半が竪穴住居ＳＩ１・２から出土しており、ほとんどが弥生後期に位置づけられる。遺物の詳細は出土遺物観察表に記しているため、ここでは代表的な遺物についてのみ説明を加える。

ＳＢ３出土遺物（第８図，図版２）　**１～４**は甕のく字状口縁破片で、緩やかに屈曲する。**３**は外面に接合痕が残る。**４**は口唇部に粗い刻目を施している。**５**は手捏ね製の小型の鉢であり、全体



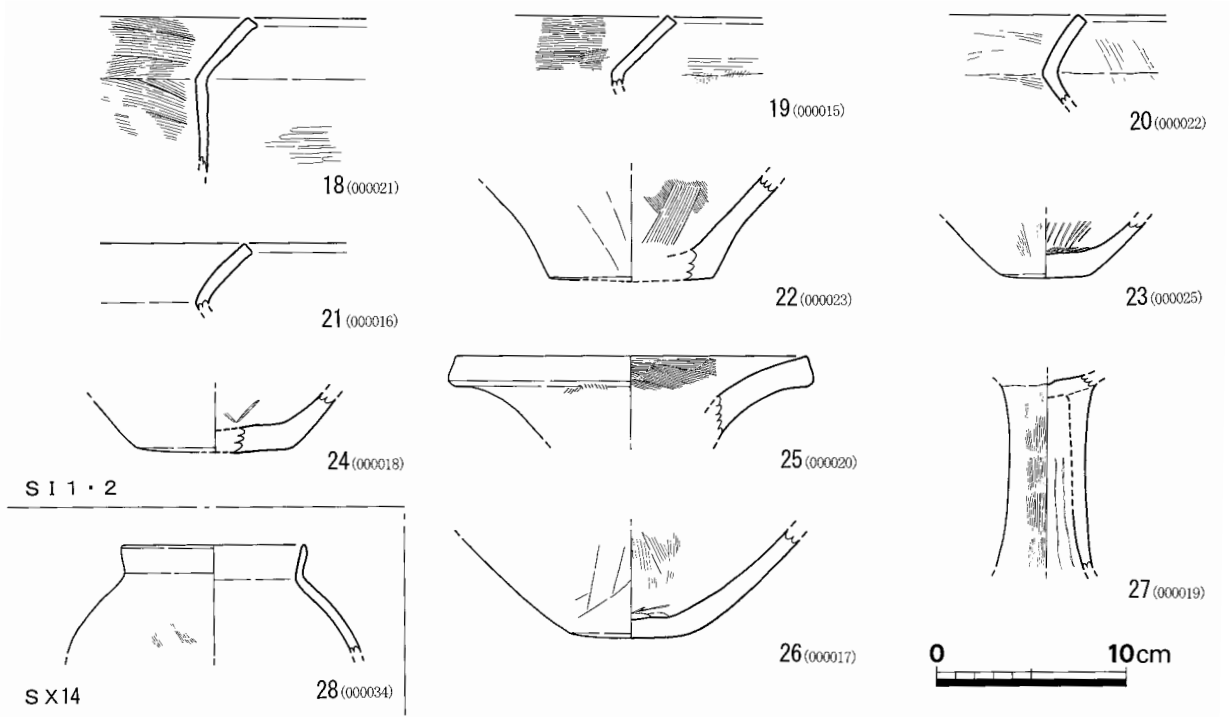
第８図　ＳＢ３、ＳＩ１出土遺物実測図（1／4，鉄製品は1／2）

に指圧痕が明瞭に残っている。底部は尖り気味で、一部に黒斑が認められる。

ＳＩ１出土遺物（第８図，図版２・３）　６～11はく字状の甕口縁で全て緩やかに屈曲する。６は丸みを帯びた口唇部で、胴部も丸みを帯びる。７は外面に丁寧な細かい刷毛目、内面は同様に丁寧な刷毛目と胴部下半は板状工具による調整が確認できる。８は長胴形で口縁部は丸みが少なく直線的。９はやや開き気味の口縁部である。10は全体に器壁が薄く、やや外反する。内面の刷毛目は単位が細かく丁寧であり、胴部との接合部では外面側に指圧痕が明瞭に認められる。11は風化による摩滅で調整は不明瞭であるが、一部口縁端部に刻目が確認される。12は甕底部である。レンズ状の尖り底で、胎土に１㎝程の大きな石英を多く含む。外底部に煤、内面に焦げが付着する。13・14は鉢である。13の口縁は僅かに外反し、端部に刻目を有する。14は風化により調整は不明瞭。15は高杯の脚部で、全体に風化による摩滅が著しいが、僅かに杯部との接合痕が認められる。16は支脚であり、外面には接合時の粘土のねじれた痕跡や、タタキ・指頭痕、内面には指頭痕・シボリ痕が強く残る。また脚底部内面付近にはナデ・押さえの痕跡がぐるっと一周まわる。17は先端が反っており、鉄鏃もしくは鉈と考えられる。

ＳＩ１・２出土遺物（第９図，図版３）　18～21はく字状の甕口縁破片である。18は屈曲が緩やかで直線的。胴部の丸みも無く、外面はタタキによる調整が施される。19・21は強く屈曲した口縁部である。また21には外面頸部に煤が付着する。22～24は甕底部で、22は平底、23・24はやや丸みを帯びる。23は底部内面に工具端痕が明瞭に残り、底部外面全体に煤が付着する事から、器台による煮炊きに使っていたと考えられる。25は器台口縁部である。内面には細かい刷毛目が施され、外面は丁寧なナデにより仕上げられている。26は壷底部であり、やや丸みを帯びる。外面は板状の工具によるナデの跡が認められる。27は高杯の脚部である。内面には成形時のシボリの痕跡がはっきりと残る。

ＳＸ14出土遺物（第９図）　28は壷口縁部で、口縁は短く直立する。　（毛利）



第９図　ＳＩ１・２、ＳＸ14出土遺物実測図（1／4）

第１表　鞍打遺跡第１次調査出土遺物観察表

遺物No.	出土遺構	種　別	器　種	法　量			色　調		調　整		胎　土	備　考	登録番号
				口径（長）	底径（幅）	器高（厚）	外　面	内　面	外　面	内　面			
1 第８図	SB3・P3	弥生土器	甕	—	—	(3.7)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ヨコナデ 刷毛目	ヨコナデ 刷毛目	細砂粒（石英、長石、金雲母）		200412 −000028
2 第８図	SB3・P3	弥生土器	甕	—	—	(3.8)	暗褐	暗褐	ヨコナデ 刷毛目	刷毛目→ヨコナデ ナデ	細砂粒（石英、金雲母）		200412 −000029
3 第８図	SB3・P4	弥生土器	甕	—	—	(3.8)	灰黄褐	灰黄褐	ヨコナデ　タタキ →刷毛目　刷毛目	ヨコナデ ナデ	細砂粒（石英、金雲母、角閃石）		200412 −000031
4 第８図	SB3・P4	弥生土器	甕	—	—	(3.5)	明褐	橙	ヨコナデ 刷毛目→ヨコナデ	ヨコナデ	細砂粒（石英、金雲母）		200412 −000032
5 第８図	SB3・P6 掘方	弥生土器	鉢	8.8	—	3.7	にぶい黄 黄灰	オリーブ褐	ナデ押さえ	ナデ押さえ	細砂粒（角閃石、長石）		200412 −000033
6 第８図	SI1	弥生土器	甕	(21.2)	—	(12.2)	橙	橙	ヨコナデ 刷毛目	ヨコナデ 刷毛目	細砂粒（石英、雲母）		200412 −000014
7 第８図	SI1	弥生土器	甕	(23.8)	—	(20.4)	にぶい黄 黒	にぶい黄	ヨコナデ 細かい刷毛目	ヨコナデ　刷毛目 細かい刷毛目→板ナデ	細砂粒（石英、金雲母、長石）		200412 −000009
8 第８図	SI1	弥生土器	甕	(22.8)	—	(25.4)	明黄褐 黒	明黄褐	タタキ→ナデ タタキ→ 一部に刷毛目 板ナデ	刷毛目	細砂粒（長石、角閃石、雲母）		200412 −000010
9 第８図	SI1	弥生土器	甕	(22.8)	—	(9.5)	褐	明黄褐	ヨコナデ 粗い刷毛目	刷毛目	1〜5㎜ の砂粒（長石、石英、角閃）		200412 −000012
10 第８図	SI1	弥生土器	甕	—	—	(4.8)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ押さえ	刷毛目 ナデ	細砂粒（長石、金雲母、角閃石）		200412 −000001
11 第８図	SI1	弥生土器	甕	—	—	(4.4)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ヨコナデ 刷毛目→ナデ	ヨコナデ 刷毛目　ナデ	細砂粒（石英、金雲母、角閃石）		200412 −000002
12 第８図	SI1	弥生土器	甕	—	—	(6.0)	橙〜にぶい橙	にぶい褐	刷毛目 ナデ	板ナデ	細砂粒（石英、長石、角閃石）5〜10㎜ の石英を数粒含む	内面に焦げ跡あり 外面に煤付着	200412 −000004
13 第８図	SI1	弥生土器	鉢	(27.7)	—	(10.8)	にぶい黄橙	灰黄褐	ヨコナデ　刻目 刷毛目	ヨコナデ 刷毛目	砂粒（石英、長石、雲母）		200412 −000005
14 第８図	SI1	弥生土器	鉢	—	—	(3.2)	黄褐	明褐	ヨコナデ	ヨコナデ 刷毛目	細砂粒（角閃石、長石、石英）		200412 −000006
15 第８図	SI1	弥生土器	高杯	—	—	(9.6)	橙	にぶい黄橙	ナデ 刷毛目	ナデ	細砂粒（長石、石英、角閃石）		200412 −000013
16 第８図	SI1	弥生土器	支脚	—	—	(12.5)	橙、赤褐、黒	黄橙	ナデ　押さえ タタキ	ナデ押さえ	2〜5㎜ の砂粒（石英、長石、角閃石）	外面の一部に黒斑あり	200412 −000011
17 第８図	SI1	鉄製品	鉄鏃	(5.5)	0.9	0.2						重量　2.9g	200412 −000008
18 第９図	SI1・2 南北トレンチ	弥生土器	甕	—	—	(8.2)	黄褐〜黒	褐	ヨコナデ タタキ	刷毛目	細砂粒（石英、角閃石、雲母）		200412 −000021
19 第９図	SI1・2	弥生土器	甕	—	—	(3.7)	黒	灰黄〜黒	刷毛目→ヨコナデ 刷毛目	刷毛目 ナデ	細砂粒（石英、長石）		200412 −000015
20 第９図	SI1・2 南北トレンチ	弥生土器	甕	—	—	(4.7)	明黄褐	明黄褐	刷毛目→ナデ	刷毛目→ナデ 刷毛目	細砂粒（石英、角閃石）		200412 −000022
21 第９図	SI1・2	弥生土器	甕	—	—	(3.5)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ヨコナデ	ヨコナデ	2〜3㎜ の砂粒（石英、長石）		200412 −000016
22 第９図	SI1・2 南北トレンチ	弥生土器	甕	—	(8.6)	(5.6)	浅黄	浅黄	板ナデ ナデ	刷毛目	砂粒（石英、金雲母、角閃石）		200412 −000023
23 第９図	SI1・2 土層トレンチ	弥生土器	甕	—	(4.8)	(3.0)	灰黄褐	明黄褐	刷毛目→ナデ ナデ	刷毛目	砂粒(石英、角閃石、長石、雲母)	外面に煤が付着	200412 −000025
24 第９図	SI1・2	弥生土器	甕	—	(8.2)	(3.1)	褐	明褐	ナデ	ナデ	1〜5㎜ の砂粒（石英、長石、金雲母、角閃石）	内面に板ナデの痕跡あり	200412 −000018
25 第９図	SI1・2	弥生土器	器台	(19.2)	—	(4.4)	灰黄褐〜橙	褐灰	ヨコナデ 刷毛目→ナデ	刷毛目	細砂粒（角閃石、長石、石英、金雲母）		200412 −000020
26 第９図	SI1・2	弥生土器	壷	—	6.4	(5.8)	黒	明黄褐	板ナデ ナデ	刷毛目 押さえ	砂粒（石英、金雲母）1㎝ 程度の石英を1個含む		200412 −000017
27 第９図	SI1・2	弥生土器	高杯	—	—	(10.3)	にぶい橙	にぶい橙	刷毛目	ナデ ナデ　しぼり	細砂粒（金雲母、微量の角閃石、長石）		200412 −000019
28 第９図	SX14	弥生土器	壷	(9.8)	—	(5.7)	明褐、黒	橙	ヨコナデ 刷毛目	ヨコナデ ナデ	細砂粒（長石、角閃石、石英）		200412 −000034

４．小　結

弥生後期後半の竪穴住居２軒と掘立柱建物１棟を除けば、近現代の撹乱が随所に見られるのみで、遺構密度は極めて低い。竪穴住居は前述のように２軒の住居が重複しているものの、先後関係は明確にし得なかった。建て替えによるものと考えた場合、仮にＳＩ１が先行するものとすれば、遺物の出土状況から見て何らかの要因（火災など）によって土器類を放置した状態で住居を廃絶し、新たに西側に重複してＳＩ２を営んだと考えれば、住居の西半部において床面から遺物がほとんど出土しない点は理解できるが、床面等が焼けていないことから明確に焼失住居とは認めがたく、推測の域を出るものではない。このように第１次調査の成果のみからでは多くを語れないのが現状であり、次章において改めて居住域に関しての検討を加えたい。　（白木）

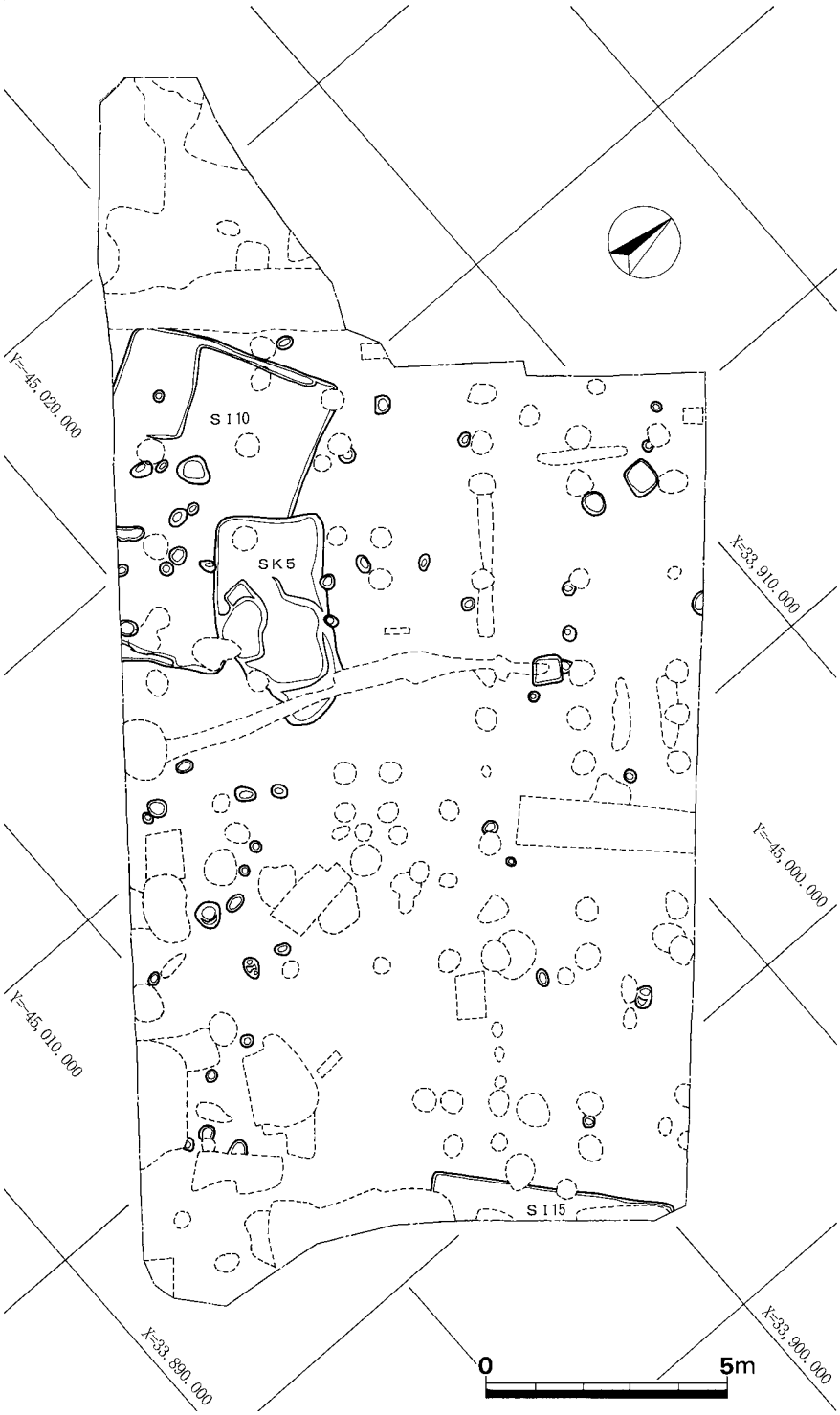
Ⅳ．第２次調査

１．調査の経過

第２次調査地は久留米市西町字北鞍打951－１，－５，－６に所在し、造成によって削平される部分を対象に実施した。周辺では区画整理事業に伴う造成工事や下水道工事等が行われていたため、各工事の工程と調整を行った後に調査に入る運びとなった。

平成19年３月13日より重機による表土剥ぎを開始する。近現代の撹乱が多く見受けられ、一部で竪穴住居のプランが確認できるものの全体に遺構密度は低い。14日より作業員を投入し、遺構の検出作業および遺構の掘り下げを開始。併せてトータル・ステーションを用いて遺構の測量を実施する。雨の影響で２日間作業を中断したものの、遺構の掘り下げが完了した段階で調査区内の清掃を行い、22日に高所作業車を用いて全体写真撮影を実施。補足作業の後、27日に重機により調査区を埋め戻し、発掘器材を撤収して現地調査を終了する。

遺構の測量はトータル・ステーションを用いて作成し、データはアイシン精機社製ソフト「遺構くんai」にて編集・保存している。また記録写真はモノクローム・カラーリバーサルともに６×７で撮影した。



第10図　鞍打遺跡第２次調査遺構配置図（1／150）

２．検出遺構

竪穴住居２軒・土坑１基およびピット以外では、ぐり石を敷き詰めた旧家屋の基礎をはじめとする撹乱が随所に認められ、全体的に遺構密度は低い。竪穴住居のうち１軒は、第１次調査で検出されたＳＩ１・２の西端部分に連続するものである。竪穴住居やピットの残存状況から判断すれば、整地等によって後世に遺構が大きく削平されてしまったものと考えられる。

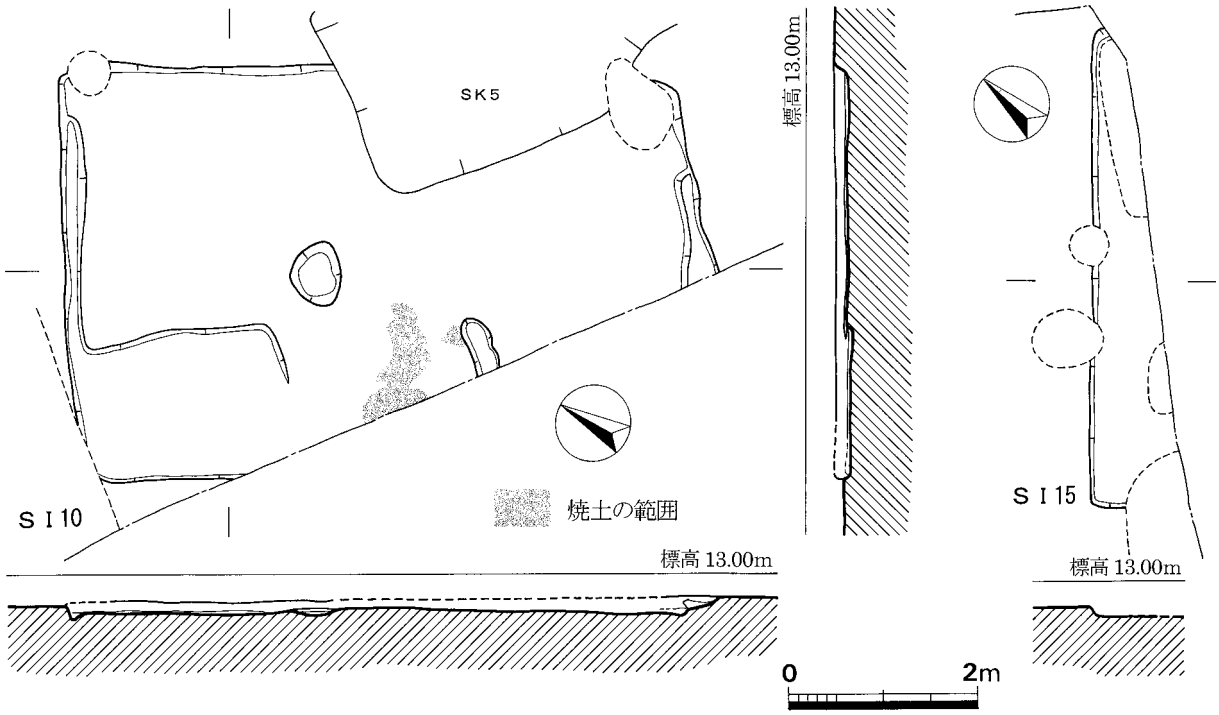
ａ）竪穴住居

ＳＩ10（第11図，図版４）　調査区南西部で検出した住居で、東側をＳＫ５によって切られる。長軸6.65ｍ×短軸4.35ｍの長方形プランを呈し、深さは10㎝ 前後と非常に浅い。南東辺の一部には壁溝が認められる。埋土は褐色土と暗褐色土との混じりで、甕・高杯などの弥生土器の他、鉄製鋤先１点も出土した。遺物は全体でビニール２袋程度見られるものの、いずれも細片が多い。また中央やや西よりには浅い炉が設けられる他、炉の南側の床面には赤変した痕跡も認められる。限られた出土遺物から判断して弥生時代後期後半に位置付けられる。

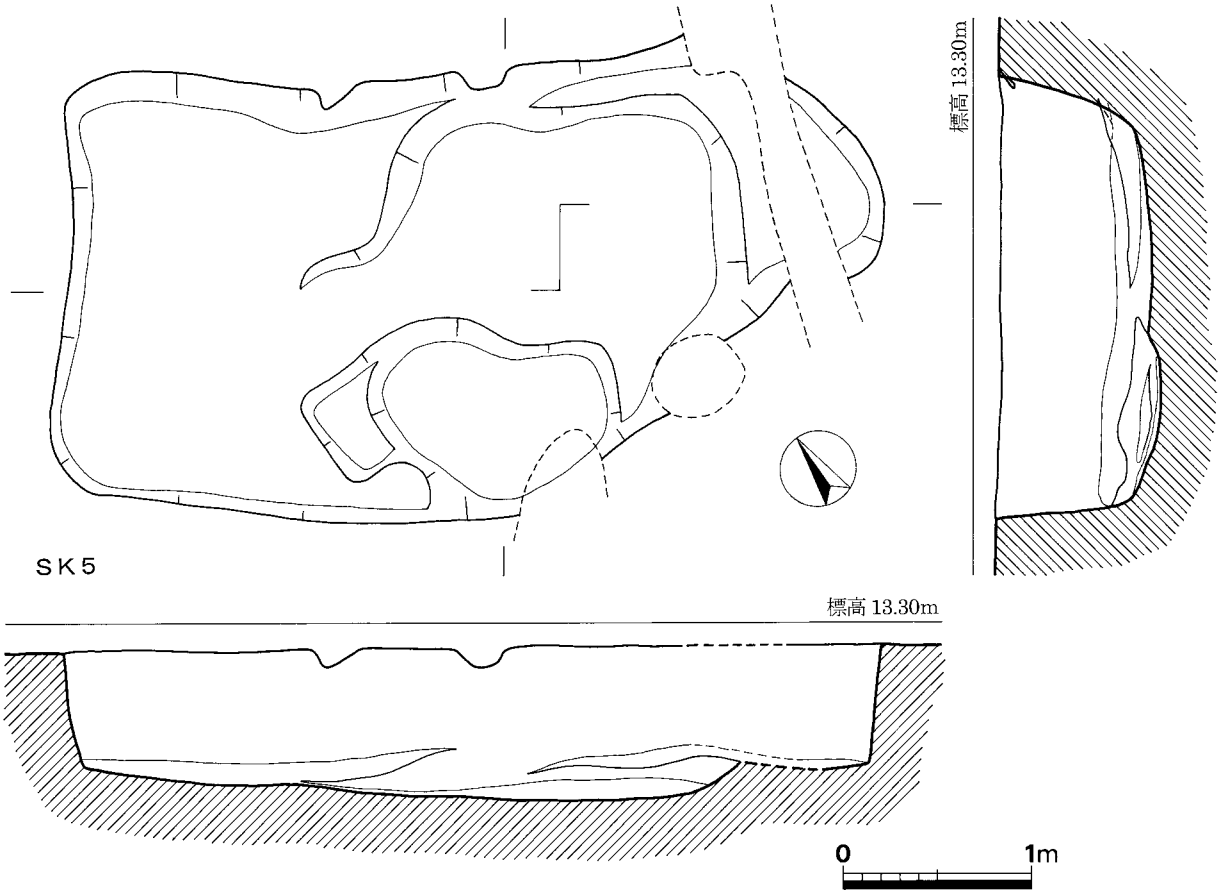
ＳＩ15（第11図，図版４）　調査区南東部に位置する、第１次調査検出のＳＩ１・２に連続する住居で、一辺5.0ｍの西壁付近のみ検出した。遺物は弥生土器の甕片が１点出土したのみであり、詳細についてはⅢ章を参照されたい。

ｂ）土　坑

ＳＫ５（第12図，図版５）　ＳＩ10を切って営まれる土坑である。一部を撹乱によって切られるものの、平面プランは長軸4.3ｍ×短軸2.3ｍの長方形もしくは楕円形プランを呈し、深さは70～80㎝前後を測る。埋土は少量の２～５㎝角の黄色土を含む暗褐色土で、底面付近のみ少量の褐色土・暗褐色土を含む黄色土であった。出土遺物の大半が土師器の破片で、須恵器は破片を含めても10数点と極めて少ない。この他には粘土塊やＳＩ10からの混入と考えられる弥生土器も見られる。須恵器の特徴から判断して６世紀後半～末の土坑と考えられる。　（白木）



第11図　ＳＩ10・15実測図（1／80）



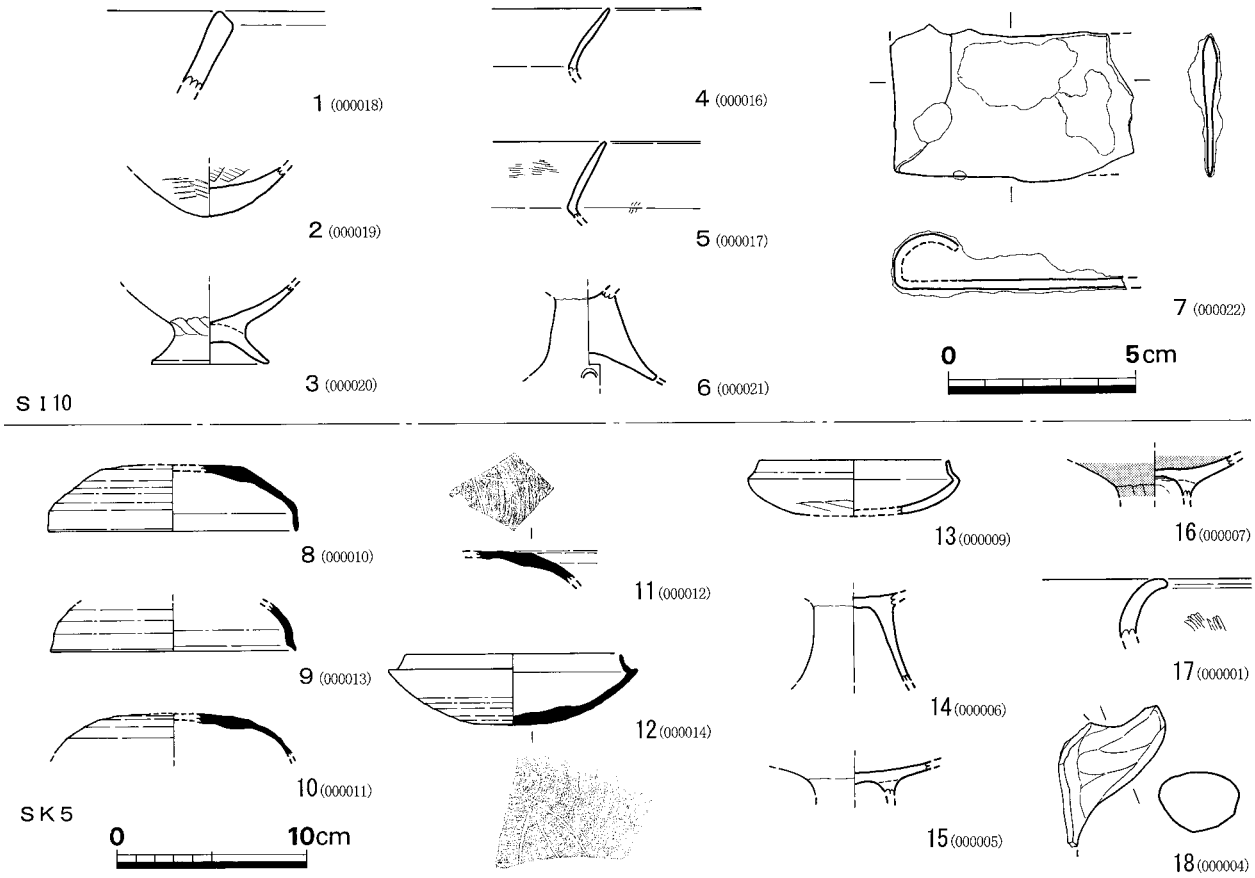
第12図　ＳＫ５実測図（1／40）

３．出土遺物

遺構の残りが良くなかったためか、全体に遺物の量は少なく、コンテナー１箱程度であった。ピットからは、それぞれ弥生土器の破片が数点しか出土しておらず、出土遺物の大半はＳＩ10とＳＫ５からのものである。ＳＩ10からビニール２袋、ＳＫ５もビニール４袋で、そのほとんどが破片である。ＳＫ５からは、土師器・須恵器の他に粘土塊、サヌカイトの剥片、チャートの石核などが出土した。ピット以外の遺物として他に、ＳＩ15から甕の胴部が出土しているが、時期の確定は出来なかった。遺物の詳細は出土遺物観察表に記しているため、ここでは代表的な遺物についてのみ説明を加える。

ＳＩ10出土遺物（第13図，図版５）　**1**は大甕の口縁部で、端部のメリハリが効いている。**2**の甕底部外面は規則的にタタキが施されている。**3**は台付甕で、脚部との接合面が露呈しており、成形の手法が窺える。**6**は高杯の脚部で、脚裾部には現状で２箇所の穿孔があり、本来は４箇所施されていたと考えられる。

ＳＫ５出土遺物（第13図，図版６）　**8**の杯蓋は、焼成は不良であるが、成形はとても丁寧である。**9**の口唇部はかすかに窪んでいる。**11**は杯蓋の天井部で、ヘラ記号が見られる。**12**の杯身も焼成はやや悪いが丁寧に作られ、底部には中心から外へ向かって放射状に３本の線が刻まれている。**13**は模倣杯で、底部は手持ちヘラケズリで成形されている。**14～16**の高杯は、脚部に微かにケズリの痕跡が残り、**16**の内外に施された丹塗りは、ともに剥離が進んでいる。　**（畠中）**



第13図　ＳＩ10・ＳＫ５出土遺物実測図（1／4，鉄製品は1／2）

第２表　鞍打遺跡第２次調査出土遺物一覧表

S－1

弥生土器	甕胴部1

S－2

弥生土器	甕胴部7
土製品	粘土塊1

S－3

弥生土器	甕胴部1

S－4

弥生土器	甕胴部1

SK5

弥生土器	甕、把手、椀、高杯、丹塗り土器、模倣杯、細片などビニール4袋
土師器	
須恵器	杯蓋7、杯身3、壺2、高杯1、細片1
石製品	石核（チャート）1、剥片（サヌカイト）1
土製品	粘土塊123

SK5下層

土師器	甕胴部16
土製品	粘土塊1

S－6

弥生土器	甕胴部1

S－7

弥生土器	甕胴部2

S－8

弥生土器	甕胴部1

S－9

弥生土器	甕胴部2

SI10

弥生土器	甕、高杯などビニール2袋
鉄製品	鋤先1
土製品	粘土塊5

SI10下層

弥生土器	甕胴部4、細片1

S－11

弥生土器	甕胴部2、器台？1、細片1

S－12

弥生土器	甕胴部2、細片2

S－13

弥生土器	甕胴部1

S－14

弥生土器	高杯脚部1

SI15

弥生土器	甕胴部1

S－16

弥生土器	甕胴部1

S－17

弥生土器	甕胴部2

S－18

弥生土器	甕胴部1

S－19

弥生土器	甕胴部1

S－21

弥生土器	甕胴部7、壺1、細片4

S－22

弥生土器	細片3

S－23

弥生土器	細片2

＊数字は破片点数

第３表　鞍打遺跡第２次調査出土遺物観察表

遺物No.	出土遺構	種　別	器　種	法　量			色　調		調　整		胎　土	備　考	登録番号
				口径（長）	底径（幅）	器高（厚）	外　面	内　面	外　面	内　面			
1 第13図	SI10	弥生土器	甕	—	—	(4.2)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ヨコナデ	ヨコナデ	砂粒（石英、長石、片岩）		200629 −000018
2 第13図	SI10	弥生土器	甕	—	—	(2.6)	明褐	橙	タタキ ナデ	刷毛目→ナデ	細砂粒（石英、角閃石）		200629 −000019
3 第13図	SI10	弥生土器	台付甕	—	6.2	(4.2)	明褐	明褐	ナデ　押さえ ナデ	ナデ	1〜3㎜の砂粒(長石、角閃石、石英)		200629−000020
4 第13図	SI10	弥生土器	壷	—	—	(3.4)	明黄褐	明黄褐	ヨコナデ	ヨコナデ	砂粒（石英、長石）		200629 −000016
5 第13図	SI10	弥生土器	壷	—	—	(4.1)	明黄褐	明黄褐	ヨコナデ	刷毛目 ナデ	細砂粒（石英、長石、角閃石）		200629 −000017
6 第13図	SI10	弥生土器	高杯	—	—	(5.0)	明褐	明褐	ナデ	ナデ	細砂粒（長石、石英、金雲母）		200629 −000021
7 第13図	SI10	鉄製品	方形鋤先	4.2	(6.4)	0.25						重量　37.0g	200629 −000022
8 第13図	SK5	須恵器	杯蓋	(13.2)	—	(3.5)	浅黄	浅黄	回転ヘラケズリ　回転ナデ	回転ナデ	微砂粒（長石、雲母）		200629 −000010
9 第13図	SK5	須恵器	杯蓋	(13.0)	—	(2.5)	黄灰	暗灰	回転ヘラケズリ　回転ナデ	回転ナデ	微砂粒（長石）		200629 −000013
10 第13図	SK5	須恵器	杯蓋	—	—	(2.3)	暗灰黄	暗赤褐	回転ヘラケズリ　回転ナデ	回転ナデ	細砂粒（5㎜程度の石英含む、長石）		200629 −000011
11 第13図	SK5	須恵器	杯蓋	—	—	(1.6)	灰	暗灰	回転ヘラケズリ　回転ナデ	回転ナデ	微砂粒（長石、石英）		200629 −000012
12 第13図	SK5	須恵器	杯身	(11.4)	(8.4)	3.8	浅黄	灰白	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ　回転ナデ→静止ナデ	細砂粒（長石、石英）		200629 −000014
13 第13図	SK5	土師器	模倣杯	(10.0)	(11.2)	(2.9)	にぶい黄橙	にぶい黄褐	回転ナデ 手持ちヘラケズリ	回転ナデ	細砂粒（赤色粒子、金雲母）		200629 −000009
14 第13図	SK5	土師器	高杯	—	—	(4.7)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	細砂粒（石英、長石、赤色粒子）		200629 −000006
15 第13図	SK5	土師器	高杯	—	—	(1.8)	橙	橙	ナデ	ナデ	微砂粒（多量の赤色粒子、金雲母）		200629 −000005
16 第13図	SK5	土師器	高杯	—	—	(2.2)	にぶい黄橙 赤	にぶい黄橙 赤	ナデ	ナデ	微砂粒（石英、金雲母）	丹塗り	200629 −000007
17 第13図	SK5	土師器	甕	—	—	(3.1)	明黄褐	にぶい黄褐	ヨコナデ 粗い刷毛目	ヨコナデ	細砂粒(石英、長石、雲母)		200629 −000001
18 第13図	SK5	土師器	把手	—	—	(7.4)	橙	橙	ナデ押さえ	ケズリ→ナデ	細砂粒（赤色粒子、長石、金雲母）		200629 −000004

４．小　結

調査区の大半が旧家屋の基礎や排水溝などの近現代の撹乱で占められており、全体的に遺構の密度は低かった。調査地は標高13m余りと周辺では最も高い部分にあたるが、そのために後世の削平も大きく、竪穴住居やピットの残存状況も決して良好とはいえなかった。ここでは第１次調査の成果も加味し、鞍打遺跡のまとめとしたい。

弥生時代の遺構はＳＩ10およびＳＩ15の２軒の竪穴住居を検出した。このうちＳＩ15は第１次調査検出のＳＩ２と同一の住居と考えられるものである。またＳＩ10からは弥生土器の破片が散乱した状態で少量出土したのみであり、いずれも弥生時代後期に属するものであった。この他、北隅で検出した方形プランを呈するピットと、北壁際で検出したピットはともに深さ50㎝余りを測るもので、ピット間の距離（2.8m）や方形ピットの主軸などを考慮すれば、第１次調査でも検出されているような掘立柱建物を構成する柱穴の可能性も考えられる。鞍打遺跡では第１・２次調査を通じ、弥生時代の遺構として掘立柱建物１棟と竪穴住居３軒が確認された訳であるが、このうち２軒の竪穴住居に関しては建て替えによる重複であり、同時併存とはなりえない。またそれぞれの竪穴住居や掘立柱建物の計画方位には統一性はないものの、いずれの遺構も後期に属するものであり、細かい時期差は見出し難い。

次に鞍打遺跡および隣接する金丸遺跡(註１)の立地に着目し、調査範囲と弥生時代の遺構をプロットすると第14図のとおりとなる。鞍打遺跡周辺は標高12〜13m程度の低台地と、南西100mに位置

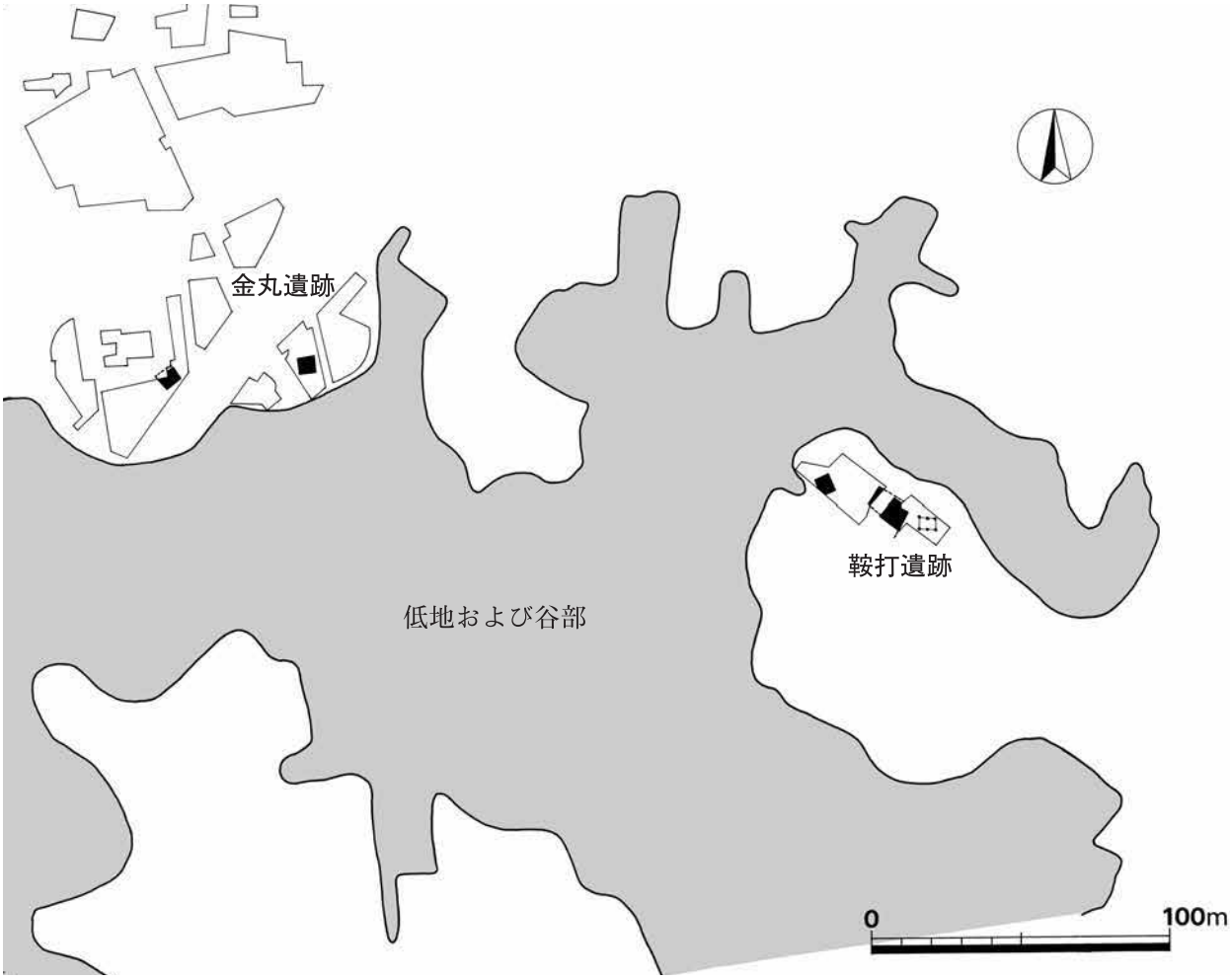
する金丸川によって開析された標高10m余りの低地とが複雑に入り込んでいる状況が看取できる。周辺域で遺跡が確認されているのは鞍打遺跡と金丸遺跡のみであり、両遺跡の中間地点では試掘調査でも遺構は未確認である。単に地形から判断すれば、かつては標高12～13mの低台地上には集落が展開していたが、後世の造成等によって遺構が削平されてしまったという可能性も考えられるものの、これは推測の域を出るものではない。ただし鞍打遺跡・金丸遺跡ともに遺構は台地の縁辺部のみでしか確認されていないことから、最も高い部分に集落の中心が存在していた可能性も十分に考えられるものである。

古墳時代の遺構は６世紀後半の土坑１基を検出したのみであり、該期の遺構は第１次調査でも検出されていない。谷部を隔てて西方に位置する金丸遺跡では３軒の竪穴住居が検出されているが、出土遺物は皆無であり、明確な時期の決め手には欠ける。久留米市街地では古墳時代の集落跡は類例が少なく、６世紀代の遺構に限っていえば、東方1.2㎞に所在する野中前遺跡第２次調査（註２）で６世紀前半の竪穴住居７軒・掘立柱建物２棟、北方1.0㎞に所在する十間屋敷遺跡第３次調査（註３）で６世紀末の溝１条・土坑１基などが確認されている程度であり、希少な発見例といえよう。

註１　久留米市教育委員会　2003『金丸遺跡Ⅲ－第５次調査－』久留米市文化財調査報告書　第191集

註２　久留米市教育委員会　1998『野中前遺跡－第２次調査－』久留米市文化財調査報告書　第146集

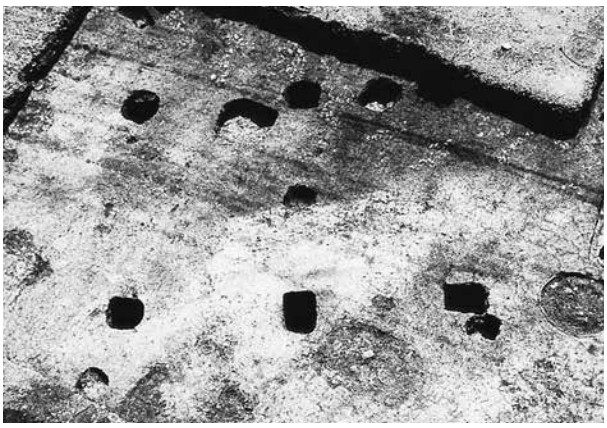
註３　久留米市教育委員会　2007『十間屋敷遺跡－第３次調査－』久留米市文化財調査報告書　第255集



第14図　鞍打遺跡周辺の弥生時代遺構と地形図（1／2,500）

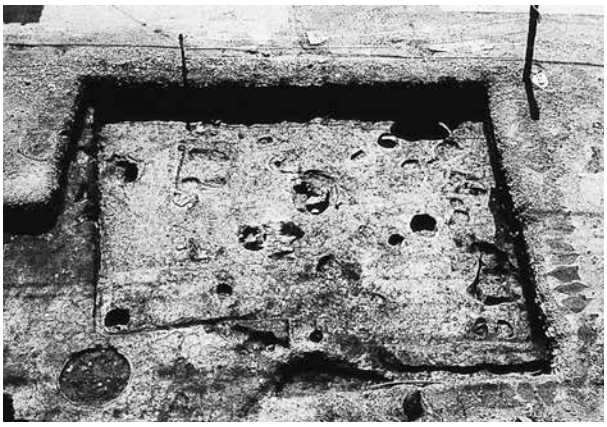
写真図版

（1）鞍打遺跡第１次調査区全景（北東から）

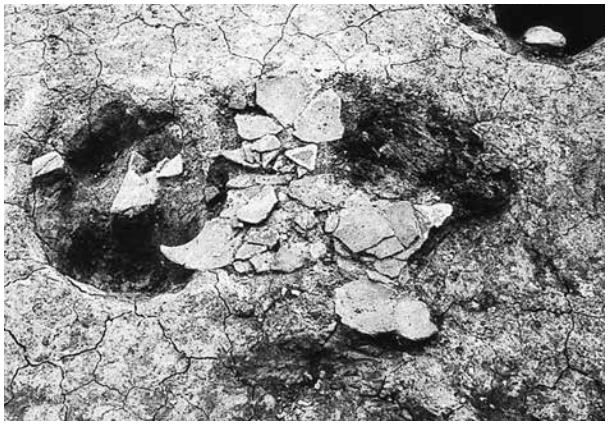


（2）ＳＢ３完掘状況（北から）

（3）ＳＢ３・Ｐ６遺物出土状況（東から）

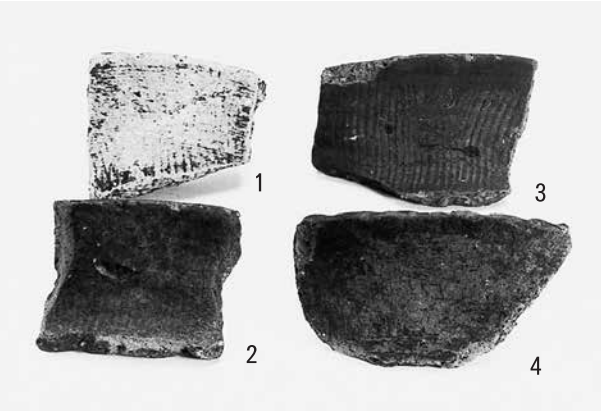


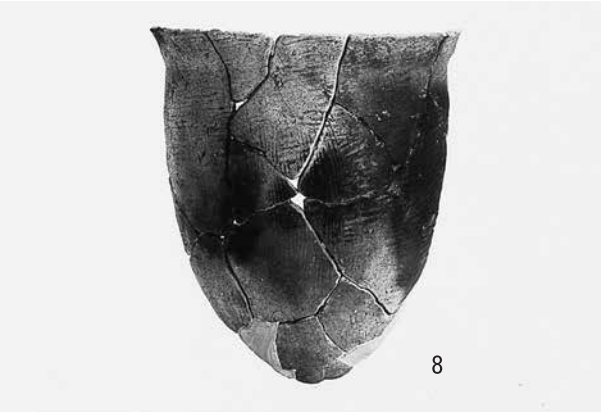
（4）ＳＩ１・２全景（北から）

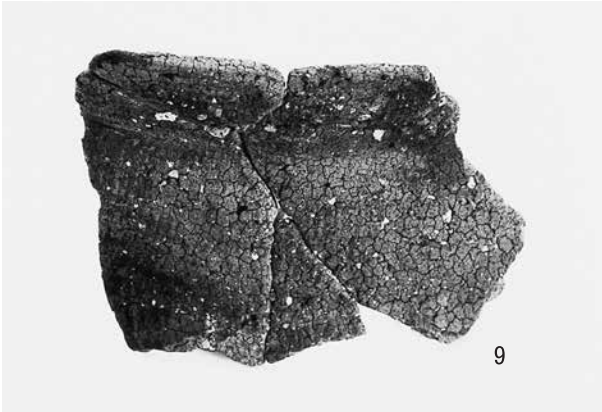


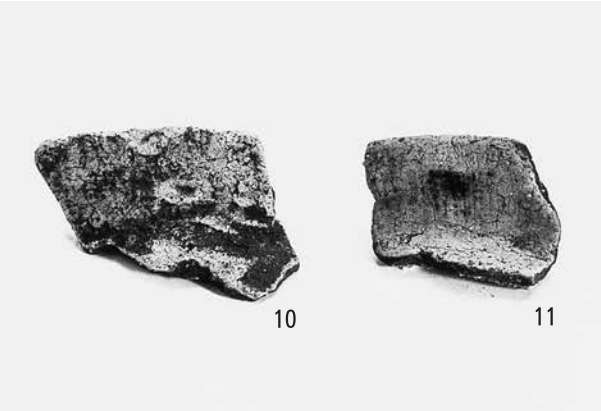
（5）ＳＩ１・２遺物出土状況（北東から）

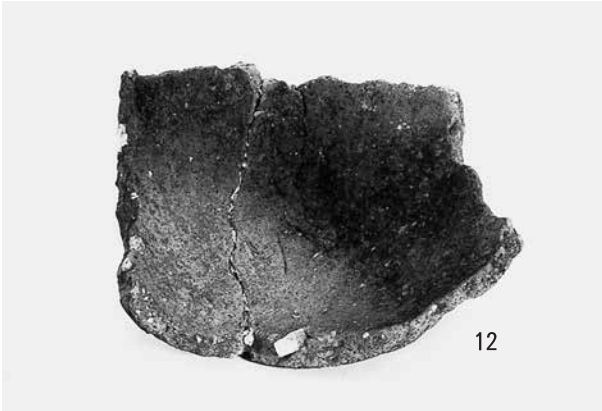
図版 2



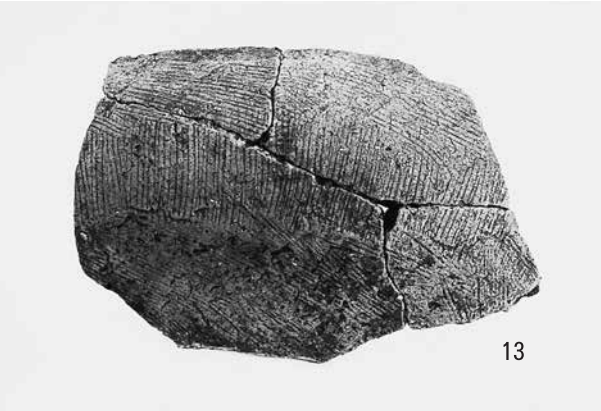


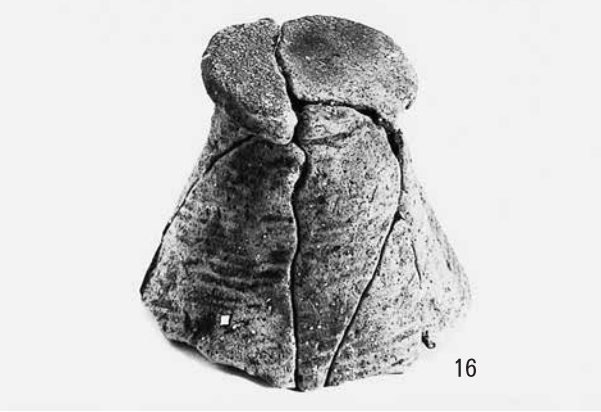


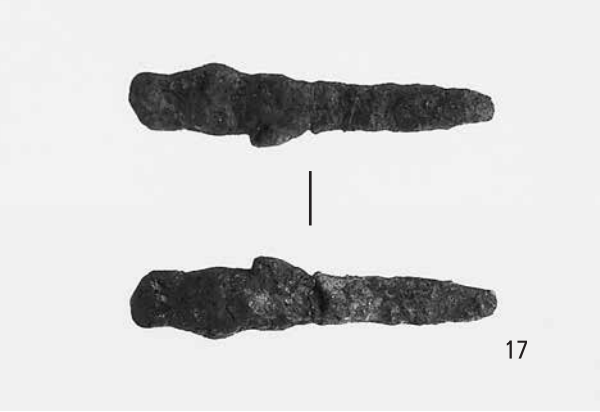


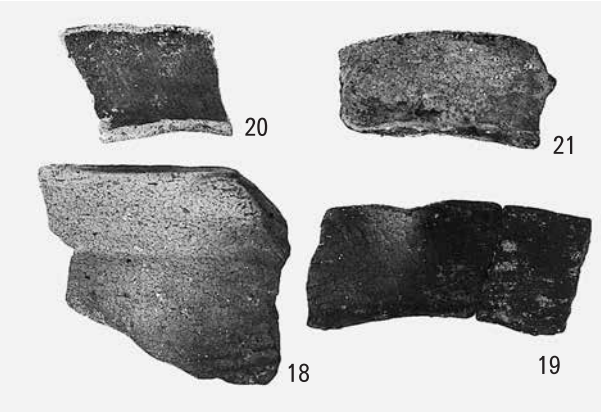


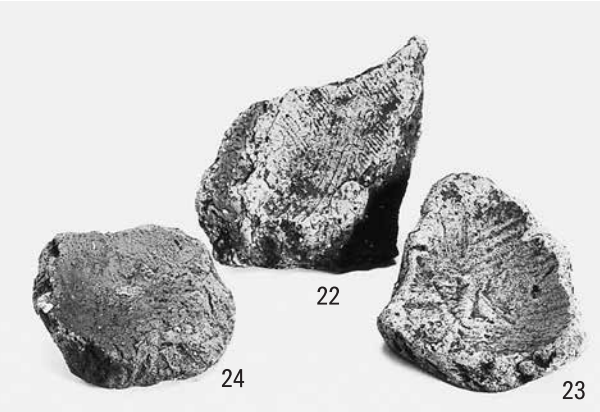
第１次調査出土遺物①

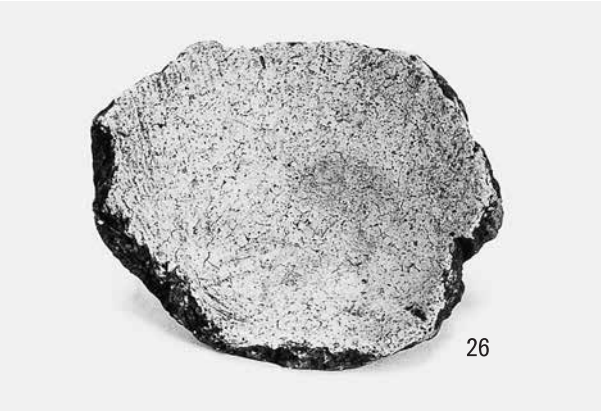












第１次調査出土遺物②

図版 4

（1）鞍打遺跡第 2 次調査区全景（南東から）

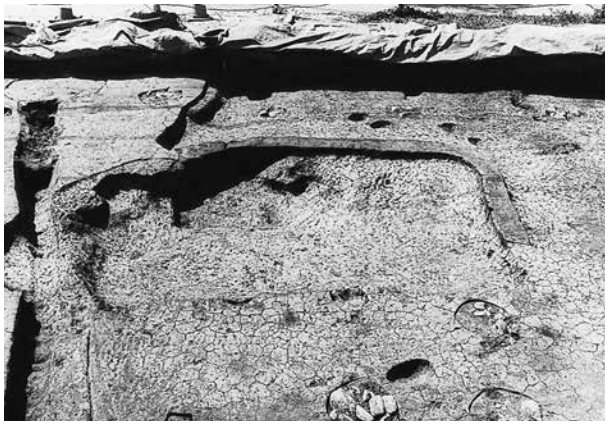
（2）ＳＩ10完掘状況（北東から）

（3）ＳＩ10炉検出状況（北東から）

（4）ＳＩ10炉断面（北東から）

（5）ＳＩ15完掘状況（南東から）

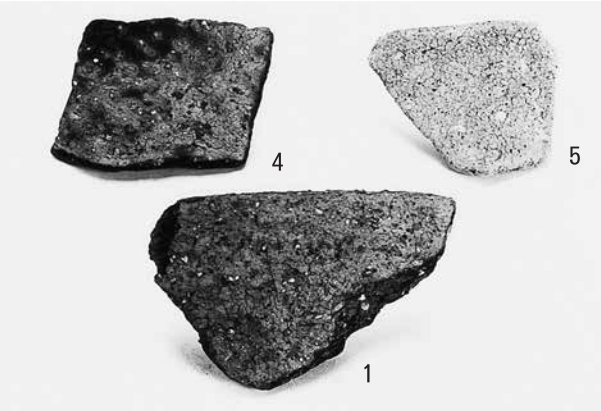
（1）ＳＫ５土層断面（北西から）



（2）ＳＫ５完掘状況（北から）

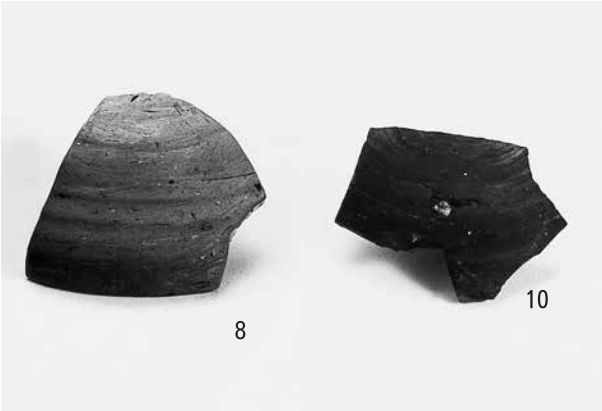
（3）作業風景（東から）

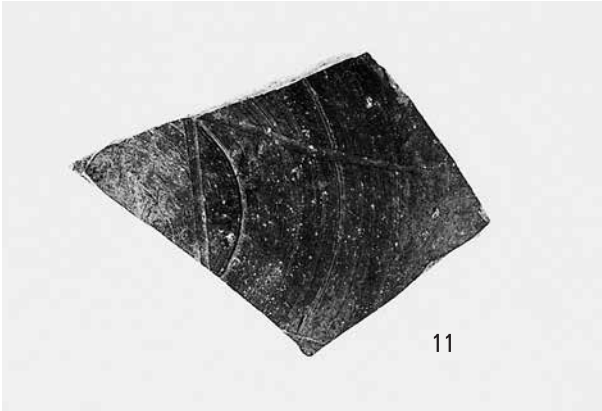
（4）調査区から北方を望む（南から）

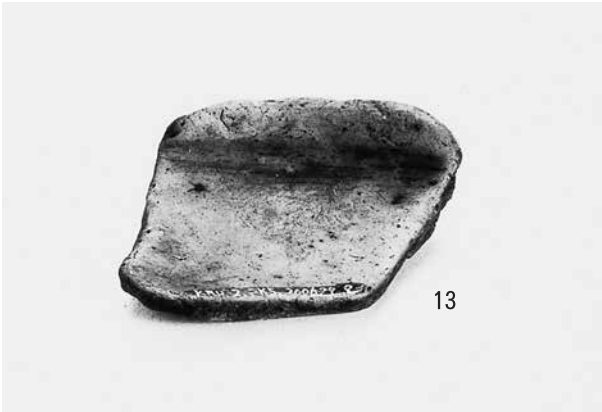


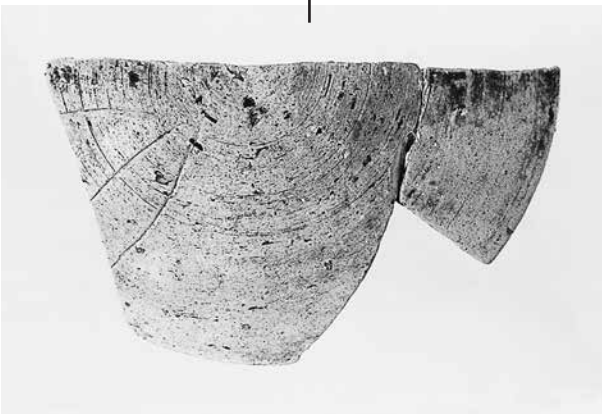
第２次調査出土遺物①

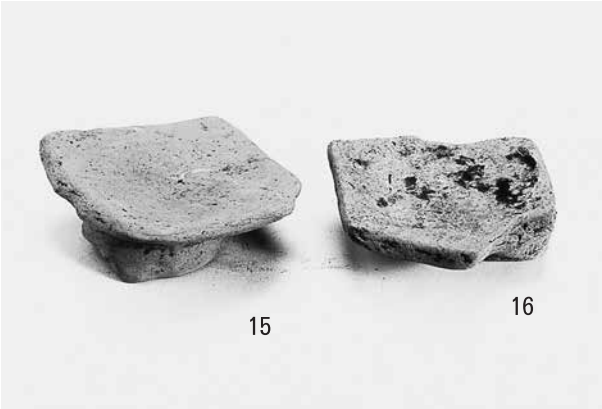
図版 6











第 2 次調査出土遺物②

報　告　書　抄　録　（1）

ふりがな	くらうちいせき１　　－だい１・２じちょうさ－
書　　名	鞍 打 遺 跡 Ⅰ　　－第１・２次調査－
副 書 名	久留米市都市計画事業「花畑駅周辺土地区画整理事業」に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（４）
シリーズ名	久留米市文化財調査報告書　第255集
編著者名	白木　守・畠中和子・毛利志保
編集機関	久留米市　文化観光部　文化財保護課
所 在 地	〒830-8520　福岡県久留米市城南町15-3　TEL 0942-30-9225　FAX 0942-30-9718 E-mail ：bunkazai@city.kurume.fukuoka.jp
発行年月日	２００７（平成１９）年１２月２８日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所　在　地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北 緯	東 経	調査期間	調査面積	調査の原因
くらうちいせき 鞍打遺跡 だいいちじちょうさ 第１次調査	くるめしにしまち 久留米市西町 あざきたくらうち 字北鞍打	40203	―	33° 18′ 17″	130° 30′ 59″	20040825 ～20040913	83㎡	区画整理事業

所収遺跡名	種　別	時　代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特　記　事　項
鞍打遺跡 第１次調査	集落跡	弥　生	掘立柱建物　　１棟 竪穴住居　　２軒	弥生土器（甕・壷・鉢・高杯・器台）、鉄製品（鉈）	竪穴住居２軒は重複しているが、ともに弥生後期の所産で時期差は認め難い

要　　約

調査地点は、標高13m程度の低台地の先端部に位置する。今回の調査では弥生時代後期の掘立柱建物１棟と竪穴住居２軒を検出した。２軒の竪穴住居は重複しており、同一場所において建て替えられたものと考えられる。先行すると思われる住居の床面付近からは、弥生土器が潰れた状態で数箇所から出土しており、一部に炭の広がりも確認できたことから焼失住居の可能性も指摘できるが、床面等は焼けておらず、推測の域をでるものではない。

土木工事の届出日	平成１６年８月１０日 （16花整第211号）	遺物の発見届日	平成１６年９月１６日 （16文財第540号）

報　告　書　抄　録（2）

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所　在　地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北　緯	東　経	調査期間	調査面積	調査の原因
鞍打遺跡 第２次調査	久留米市西町 字北鞍打	40203	—	33° 18′ 17″	130° 30′ 59″	20070313 ～20070327	249㎡	区画整理事業

所収遺跡名	種　別	時　代	主な遺構	主な遺物	特記事項
鞍打遺跡 第２次調査	集落跡	弥　生 古　墳	竪穴住居　２軒 土坑　１基	弥生土器（甕・壷・高杯）、鉄製品（鋤先） 須恵器（杯蓋・身）、土師器（甕・高杯）	竪穴住居２軒のうち１軒は、第１次調査で検出された住居と同一の住居。

要　約

調査地点は、標高13ｍ程度の低台地の先端部、第１次調査地点の西隣りに位置する。今回の調査では弥生時代後期の竪穴住居２軒と６世紀後半の土坑１基を検出した。竪穴住居２軒のうち１軒は第１次調査検出のＳＩ２と同一の住居と考えられる。また６世紀後半の土坑は、古墳時代集落の検出が皆無に等しい市街地にあって、希少な検出例として注目されるものである。

土木工事の届出日	平成１９年２月２３日 （18花整第297−1号）	遺物の発見届日	平成１９年３月２９日 （18文財第1433号）

＊北緯・東経は「世界測地系」に基づく

鞍打遺跡Ⅰ
【久留米市文化財調査報告書　第257集】
平成１９年１２月２８日
発 行　久留米市教育委員会
編 集　久留米市
文化観光部文化財保護課
印 刷　凸版印刷株式会社